來ない迚もこんな長い物を」「ソリヤ見たことか拔けもせぬものを飾て置くと云ふ馬鹿者があるか僕は一切刀を罷めて居るが憚りながら拔くことは知て居るぞ拔て見せやう」と云て四尺ばかりもある重い刀を取て庭に下りて兼て少し覺え居る居合の術で二三本拔て見せて「サア見給へ此通りだどうだ君には拔けなからう其拔ける者は疾くに刀を賣て仕舞たのに拔けない者が飾て置くとは間違ひではないか、是れは獨り吾々洋學者ばかりでない日本國中の刀を皆なうつちやつて仕舞ふと云ふことにしなければならぬ、だからこんなものは颯々と片付けて仕舞ふが宜しい君も今から廢刀と決心していよ〳〵飾りに挾さなければならんと云ふなら小刀でも何でも宜しい」と云て大きに論じた事がある

是れも大抵同時代と思ふ幕府の飜譯局に雇れて其處に出て居た時或人が私に語すに「近來なか〳〵面白い扇子が流行る鐵扇と云ふものは昔から行はれて居たが今はソレが大に進歩して唯の扇子と見せて置て其實はヒョイと拔くと懷劍が出て來るなか〳〵面白い事を發明した」と噂して居るソコで私が大にまぜかへして遣た「扇子の中から懷劍の出るのが何が賞めた話だ、それよりも懷劍として置てヒョイと拔くと中から扇子の出るのが本當だ、倒まにしろ、爾うしたら賞めて遣る、そんな馬鹿な殺伐な事をする奴があるものか面白くもない」と云て打毀した事を覺えて居ます

幕府が倒れると私はスグ歸農して夫れ切り双刀を廢して丸腰になると塾の中でも段々廢刀者が出來る所が此廢刀と云ふ事は中々容易な事でない實を申せば持兜器を罷めるのだから世間の人は悅びさうなものだが決して爾うでない私が始めて腰の物なしで汐留の奥平屋敷

に行た所が同藩士は大に驚き丸腰で御屋敷に出入するとは殿様に不敬ではないかなどゝ議論する者もありました又或るとき塾の小幡仁三郎と誰か二三人で散歩中その廢刀を何處かの壯士に見咎められて怖い思ひをした事もある、けれども私は斷然廢刀と決心して少しも世の中に頓着せず「文明開國の世の中に難有さうに兇器を腰にして居る奴は馬鹿だ其刀の長いほど大馬鹿であるから武家の刀は之を名けて馬鹿メートルと云ふが好からう」などゝ放言して居れば塾中にも自から同志がある明治四年新錢座から今の三田に移轉した當分の事と思ふ或日和田義郎(今は故人になりました)と云ふ人が思切た戯をして壯士を驚かしたことがある此人は後に慶應義塾幼稚舍の舍長として性質極めて溫和、大勢の幼稚生を實子のやうに優しく取扱ひ生徒も亦舍長夫婦を實の父母のやうに思ふと云ふ程の人物であるが本來は和歌山藩の士族で少年の時から武藝に志して體格も屈强殊に柔術は最も得意で所謂怖いものなしと云ふ武士であるが一夕例の丸腰で二三人連れ芝の松本町を散歩して行くと向ふから大勢の壯士が長い大小を横たへて大道狹しと遣て來るスルと和田が小便をしながら往來の眞中を歩いて行くサア此小便を避けて左右に道を開くか、何か咎め立てして喰て掛るか爰が喧嘩の間一髪、いよ〳〵掛て來れば五人でも十人でも投り出して殺して仕舞ふと云ふ意氣込が先方の若武者共に分たか何にも云はずに避けて通たと云ふ大道で小便とは今から考へれば隨分亂暴であるが亂世の時代には何でもない、こんな亂暴が却て塾の獨立を保つ爲めになりました

相手は壯士ばかりでない唯の百姓町人に對しても色々試みた事がある其頃私が子供を連れて江ノ島鎌倉に遊び七里ケ濱を通るとき向ふ

から馬に乘て來る百姓があつて私共を見るや否や馬から飛下りたから私が咎めて是れ貴樣は何だと云て馬の口を押へて止めると百姓が怖はさうな顏をして頻りに詫るから私が「馬鹿云へ爾うぢやない此馬は貴樣の馬だらう」「ヘイ」「自分の馬に自分が乘たら何だ、馬鹿な事するな乘て行け」と云ても中々乘らない「乘らなけりや打撲るぞ早く乘て行け貴樣は爾う云ふ奴だからいけない今政府の法律では百姓町人乘馬勝手次第誰が馬に乘て誰に逢ふても構はぬ早く乘て行け」と云て無理無體に乘せて遣りましたが其時私の心の中で獨り思ふに古來の習慣は恐ろしいものだ此百姓等が教育のない計りで物が分らずに法律のあることも知らない下々の人民がこんなでは仕方がないと餘計な事を案じた事がある

夫れから又斯う云ふ面白い事がありました明治四年の頃でした攝州三田藩の九鬼と云ふ大名は兼て懇意の間柄で一度は三田に遊びに來いと云ふ話もあり私も其節病後の身で有馬の溫泉にも行て見たし、かた〳〵先づ大阪まで出掛けて大阪から三田まで凡そ十五里途中名鹽に一泊する積りにしてソコで大阪に行けば何時でも緒方の家を訪問しないことはない、故先生は居ないでも未亡夫人が私を子のやうにして愛して呉れるから大阪に着くと取敢へず緒方に行て三田に遊び有馬に行くことなども話しました所が私は病後でどうも歩けさうにない駕籠を貸して遣らうと云はれるので其駕籠をつらせて大阪を出立した頃は舊暦の三四月誠に好い時候で私はパッチを穿て羽織か何か着て蝙蝠傘を持て駕籠に乘て行くつもりであつたが少し歩いて見るとなか〳〵歩ける「コリヤ駕籠は要らぬ駕籠屋先へ行け、乃公は一人で行くから」と云てたつた一人で供もなければ連れもない話相手がなく

て面白くない所から何でも人に逢ふて言葉を交へて見たいと思ひ往來の向ふから來る百姓のやうな男に向て道を聞たら其とき私の素振りが何か横風で、むかしの士族の正體が現はれて言葉も荒らかつたと見える、すると其百姓が誠に丁寧に道を教へて呉れてお辭儀をして行く、こりや面白いと思ひ自分の身を見れば持て居るものは蝙蝠傘一本きりで何にもない、も一度遣て見やうと思ふて其次ぎに來る奴に向て呶鳴り付け「コリや待て、向ふに見える村は何と申す村だシテ村の家數は凡そ何軒ある、あの瓦屋の大きな家は百姓か町人か主人の名は何と申すなどゝ下らぬ事をたゝみ掛けて士族丸出しの口調で尋ねると其奴は道の側に小さくなつて恐れながら御答申上げますと云ふやうな樣子だ此方はます〳〵面白くなつて今度は逆に遣て見やうと思付き又向ふから來る奴に向て「モシモシ憚りながら一寸ものをお尋ね申しますと云ふやうな口調に出掛けて相替らず下らぬ問答を始め私は大阪生れで又大阪にも久しく寄留して居たから其時には大抵大阪の言葉も知て居たから都て奴の調子に合せてゴテ〳〵話をすると奴は私を大阪の町人が掛取にでも行く者と思ふたか中々〳〵横風でろくに會釋もせずに颯々と別れて行く、底で今度は又その次ぎの奴に横風をきめ込み又其次ぎには丁寧に出掛け、一切先方の面色に取捨なく誰でも唯向ふから來る人間一匹づゝ一つ置きと極めて遣て見た所が凡そ三里ばかり歩く間、思ふ通りに成たがソコで私の心中は甚だ面白くない如何にも是れは仕樣のない奴等だ誰も彼も小さくなるなら小さくなり、横風ならば横風で可し、斯う何うも先方の人を見て自分の身を伸縮するやうな事では仕樣がない、推して知るべし地方小役人等の威張るのも無理はない、世間に壓制〳〵政府と云ふ說があるが是れは政府の壓制で

はない人民の方から壓制を招ぐのだ、之を何うして吳れやうか捨てやうと云て固より見捨てられる者でない左ればとて之を導いて俄に敎へやうもない如何に百千年來の餘弊とは云ひながら無敎育の土百姓が唯無闇に人に詫るばかりなら宜しいが先き次第で驕傲になつたり柔和になつたり丸でゴムの人形見るやうだ如何にも賴母しくないと大に落膽したことがあるが變れば變る世の中でマア此節は其ゴム人形も立派な國民と成て學問もすれば商工業も働き兵士にすれば一命を輕んじて國の爲めに水火にも飛込む福澤が蝙蝠傘一本で如何に士族の假色を使ふても之に恐るゝ者は全國一人もあるまい是れぞ文明開化の賜でせう

私の考は塾に少年を集めて原書を讀ませる計りが目的ではない如何樣にもして此鎖國の日本を開て西洋流の文明に導き富國强兵以て世

界中に後れを取らぬやうにしたい左りとて唯これを口に言ふばかりでなく近く自分の身より始めて假初めにも言行齟齬しては濟まぬ事だと先づ一身の私を愼しみ、一家の生活法を謀り、他人の世話にならぬやうにと心掛けて扨一方に世の中を見て文明改進の爲めに施して見たいと思ふ事があれば世論に頓着せず思切て試みました例へば前にも申した通り學生から授業料の金を取立てる事なり、武士の魂と云ふ双刀を棄てゝ丸腰になる事なり、演說の新法を人に說て之を實地に施す事なり、又は著譯書に古來の文章法を破て平易なる通俗文を用ふる事なり、凡そ是等は當時の古風家に嫌はれる事であるが幸に私の著譯は世間の人氣に投じて渴する者に水を與へ大旱に夕立のしたやうなもので其賣れたことは實に驚く程の數でした時節の惡いときにドンな文章家ドンな學者が何を著述したつて何を飜譯したつて私の出版

書のやうに賣れやう譯はない畢竟私の才力がエライと云ふよりも時節柄がエラかつたのである又その時代の學者達が筆不調法であつたか、馬鹿に青雲熱に浮かされて身の程を知らず時勢を見ることを知らなかつたかマア其くらゐの事だと思はれる兎にも角にも著譯書が私の身を立て家を成す唯一の基本になつてソレで私塾を開ても生徒から僅ばかりの授業料を掻集めて私の身に着けるやうなケチな事をせずに全く教師等の所得にすることが出來た其上に折々私の財嚢から金を出して塾用を辨ずることも出來ました

所で私の性質は全體放任主義と云はうか又は小慾にして大無慾とでも云はうか塾の事に就て朝夕心を用ひて一生懸命些細の事まで種々無量に心配しながら又一方では此塾にブラサガツて居る身ではない、是非とも慶應義塾を永久に遺して置かなければならぬと云ふ義務もなければ名譽心もないと初めから安心決定して居るから隨て世の中に怖いものがない同志の後進生と相談して思ふ通りに事を行へば塾中自から獨立の氣風を生じて世間の反りに合はぬことも多いのと又一つには私が政治社會に出ることを好まずに在野の身でありながら口もあれば筆もあるから颯々と言論して時としては其言論が政府の癪に障ることもあらう實を云へば私は政府に對して不平はない、役人達の以前が無鐵砲な攘夷家であらうとも人を困らせた奴であらうとも一切既往を云はず唯今日の文明主義に變化して開國一偏に國事を經營して呉れゝば遺憾なしと思へども何かの氣まぐれに官民とか朝野とか忌に區別を立てゝ私塾を疎外し邪魔にして甚だしきは之を妨げんなんとケチな事をされたのには少々困りました今これを云へば話も長し言葉も穢くなるから拔きにして近年帝國議會の開設以來は

官邊の風も大に改まりて餘り酷い事はない何れ遠からぬ中に双方打解けるやうに成るでせう

又私は知る人の爲めに盡力したことがあります是れは唯私の物數寄ばかり決して政治上の意味を含んで居るのでも何でもない眞實一身の道樂と云はうか慈悲と云はうか癇癪と云はうかマアそんな所から大に働いたことがあります仙臺藩の留守居役を勤めて居た大童信太夫と云ふ人があつて舊幕府時代から私は其人と極懇意にして居ました云て其人が蘭學者でもなければ英學者でもない、けれども兎に角に西洋文明の風を好み洋學書生を愛して樂しみにして居る所は氣品の高い名士と申して宜しい當時諸藩の留守居役でも勤めて居れば藝者を上げて騒ぐとか茶屋に集まるとか相撲を最員にするとか云ふのが江戸普通の風俗で大童も大藩の留守居だから隨分金廻はりも宜か

つたらうと思はれるに絶えてそんな馬鹿な遊びをせず唯何でも書生を養て遣ると云ふことが面白くて書生の世話ばかりして凡そ當時仙臺の書生で大童の家の飯を喰はない者はなからう今の富田鐵之助を始め一人として世話にならない者はない、所が幕末の時勢段々切迫して王政維新の際に仙臺は佐幕論に加擔して忽ち失敗して其謀主は但木土佐と云ふ家老であると定まつて其人は腹を切て仕舞つた其後で但木土佐が謀主だと云ふけれども其實は謀主の謀主があるソレは誰だと云ふに大童信太夫、松倉良介の兩人だと斯う云ふ譯けで維新後其兩人は仙臺に歸て居た所がサア其仙臺の同藩中の者から妙な事を饒舌り出した、既に政府は朝敵の處分をして事濟になつては居るが内からそんなとを云ひ出してマダ罪人が幾人もあると訴へたからにはマサか捨てゝも置かれぬと云ふ所から久我大納言を勅使として下向を

命じたと云ふ政府の趣意は甚だ旨い、此時に政府は既に處分濟の後だから成る丈け平穩を主として事を好まぬソコで久我と仙臺家とは親類であるから久我が行けば定めて大目に見るであらう、左すれば怪我人も少ないだらうと云ふ爲めに態と久我を擇んだと云ふことは其時私も窃に聞きました政府の略は中々行屆いて居る所が仙臺の藩士が有らうことか有るまいとか御上使の御下向と聞て景氣を催し生首を七ツとやら持て出たので久我も驚いたと云ふ、そんな事まで仙臺藩士が遣た其時に松倉も大童も居れば危ないから脊戸口から駈出して東京まで逃げて來たと云ふのは兩人ともモウちやんと首を斬られる中に數へられて居た其次第を誰か告げて呉れる者があつて其儘家を飛出して東京へ來て潜んで居る其中にも仙臺藩の人が在京の同藩人に對して樣々殘酷な事をして既に熱海貞爾と云ふ男は或夜今其處で同藩士に追駈けられたと申して私方に飛込んで助かつた事さへありましたが此物騒な危ない中にも大童と松倉はどうやら斯うやら久しく免かれて居て私は素より懇意だから其居處も知て居れば私の家にも來る政府の人から見られるのは苦しくない政府はそんな野暮はしないそんな者を見やうともしないが何分にも同藩の者が遣るので誠に危ない引捕へて是れが罪人でございと云へば如何に優しい大目な政府でも唯見ては居られない實に困た身の有樣だと毎度兩人と話す中に私は兩人の爲めに同情を表すると云ふよりも寧ろ此仙臺藩士の無情殘酷と云ふことに酷く腹が立ちました弱武者の意氣地のない癖に酷い事をする奴だドウかして呉れたいものだと斯う考へた所で夫れから私が大童に面會してドウか青天白日の身になる工夫がありさうなものだ私が一つ試みて見やう何でも是れは一番藩主を引捕へて

談ずるが上策だらうと相談して私は大きに御苦勞な譯けだけれども日比谷内にある仙臺の屋敷に行て藩主に御目に懸りたいと觸込んで藩主に面會したソコで私が此藩主に向て大に談じられる由緣のあると云ふのは其藩主と云ふ者は伊達家の分家宇和嶋藩から養子に來た人で前年養子になると云ふ其時に私が與て大に力がある、と云ふのは當時大童が江戸屋敷の留守居で世間の交際が廣いと云ふので養子選擇の事を一人で擔任して居て或時私に談じて「お前さんの處(奥平家)の殿樣は宇和嶋から來て居る其兄さんが國(宇和島)に居る其人の强弱智愚如何を聞て貰ひたい」と云ふから早速取調べて返事をして先づ大童の胸に落ちて今度は宇和島家の方に相談をして貰ひたいと云ふので夫れから又私は麻布龍土の宇和島の屋敷に行て家老の櫻田大炊と云ふ人に面會して其話をすると一も二もなく本家の養子にならうと云

ふのだから唯難有いとの卽答、一切大童と私と二人で周旋して夫れから表向きになつて貰た其人が其時の藩主になつて居るのでソコで私が其藩主に遇ふて「時に尊藩の大童、松倉の兩人が此間仙臺から逃げて參たのは彼方に居れば殺されるから此方に飛出して來たのであるが彼の兩人は今でも見付け出せば藩主に於て本當に殺す氣があるのか但し殺したくないのかソレを承りたい」「イヤ決して殺したいなどゝ云ふ意味はない」「然らばモウ一歩進めてお前さんはソレを助けると云ふ工夫をしてドウかして命の繋がるやうにして遣ては如何で御座る實はお前さんは大童に向て大に報いなければならぬことがある知るや知らずやお前さんが仙臺の御家に養子に來たのは斯う云ふ由來、是れ〳〵の次第であつたが、夫れを思ふても殺すことは出來まい屹度御決答を伺ひたい」と顏色を正しくして談じた處が「決して殺す氣はないが

是れは大參事に任かしてあるから大參事さへ助けると云ふ氣になれば私には勿論異論はない」と云ふマダ若い子供でしたから何事も大參事に任かしてあつたのでせう「然らばお前さんは確かだな」「確かだ」「ソレならば宜しい大參事に遇はう」と云て直ぐ側の長屋に居たから其處へ捩込んだ「サア今藩主に話をして來たがドウだ藩主は大參事次第だと確かに申された然らば則ち生殺はお前さんの手中にある、殺す氣か、殺さぬ氣か、假しや殺す積りで搜し出さうと云ても決して出る氣遣ひはない私はちやんと居處を知て居る、搜せるなら試みに搜して見るが宜い、捕縛すると云ふなら私の力の有らん限り隱蔽して見せやう、出來るだけ摘發して見なさい何時まで經ても無益だ、そんな事をして人を苦しめないでも宜いだらう」と裏表から色々話すと大參事にも言葉がないいよ〳〵助ける、助けるけれども薩州邊りから何とか口を添へて吳

れると都合が宜いなんて又弱い事を云ふから宜しいと云ひ棄てゝ夫れから私は薩州の屋敷に行て斯う〳〵云ふ次第柄だから助けて遣て吳れぬかと云ふと大藩とか强藩とか云ふので口を出すのは實は迷惑な話だが何も六かしい事はない宮內省に辨事と云ふものがあるから其者に就て政府の內意を聞て上げるからと云て薩摩の公用人が政府の內意を聞て私の處に報知して吳れたには兎も角も自訴させるが宜しい自訴すれば八十日の禁錮ですつかり罪は滅びて仕舞ふと云ふことが分た夫れから念の爲め私は又仙臺の屋敷に行て大參事に面會して政府の方は自訴すれば八十日と極て居るが之にお負けが付きはしないか自訴と云へば此屋敷に自訴するのであるが此屋敷で本藩の私を以て八十日を八年にして遣らうなんと云ふお負けを遣りはしないかソレを確かに約束しなければ玉は出されないと念に念を入れて問

答を重ね、最後には若し違約すれば復讐するとまで脅迫していよ〳〵大丈夫と安心してソレから其翌日兩人を連れて日比谷の屋敷に行た所が屋敷の役所見たやうな處には罪人大童松倉の舊時の屬官ばかりが列んで居るだらう罪人の方が餘程エライ、オイ貴樣はドウして居るのだと云ふやうな調子で私は側から見て可笑しかつた夫れから宇田川町の仙臺屋敷の長屋の二階に八十日居てソレで事が濟んでソレから二人は青天白日外を歩くやうになつて其後は今日に至るまでも舊の通りに交際して互に文通して居ます生涯變らぬ事でせう只此事たるや仙臺藩の無氣力殘酷を憤ると同時に藩中稀有の名士が不幸に陷りたるを氣の毒に感じたからのことで隨分彼方此方と歩き廻りましたが口で云へば何でもないけれども人力車のある時節ではなし一切歩いて行かなければならぬから中々骨が折れまし

夫れから榎本(當年の釜次郎今の武揚)の話をしませう前に申す通りに古川節藏は私の家から脫走したやうなもので後で聞て見れば榎本よりか先きに脫走したさうで房州鋸山とか何處とかに居た佐幕黨の人を長崎丸に乘せてソレを箱根山に上げてソレで箱根の騷動が起たのであれは古川節藏が遣たのだと申します節藏が脫走した後で以て脫走艦は追々函館に行て夫れから古川の長崎丸と一處に又此方へ侵しに來た、と云ふのは官軍方の東艦卽ち私などが亞米利加から持て來た東艦が官軍の船になつて居るソレを分捕りしやうと云ふことを企てゝさうして奥州宮古と云ふ港で散々戰た所が負けて仕舞て到頭降參して夫れから東京へ護送せられて其時は法律も裁判所も何もないときで糺問所と云ふ牢屋のやうなものがあつて其糺問所の手に掛て古川節藏と前年私が米國に同行した小笠原賢藏と云ふ海軍士官と二人

連れで霞ヶ關の藝州の屋敷に監禁されて居るソコで私は前には馬鹿をするなと云て止めたのであるけれども監禁されて居ると云へば可哀想だ幸ひ藝州の屋敷に懇意な醫者が居るから其醫者の處に行てドウかして古川に遇ひたいものだが遇はして呉れぬかと云たらば番人も何も居ないやうであつたが其醫者の取計ひで遇はして呉れました夫れから長屋の暗いやうな處に行て見ると二人がチャンと這入て居るから私が先づ言葉を掛けて「ザマァ見ろ、何だ仕様がないぢやないか止めまいことか、あれ程乃公が止めたぢやないか今更ら云たつて仕方はないが何しろ喰物が不自由だらう着物が足りなからう」と云て夫れから宅に歸て毛布を持て行て遣たり牛肉の煮たのを持て行て遣たり戰爭中の樣子や監禁の苦しさ加減を聞たりした事があるので私は糺問所の有樣を知て居ます

所が榎本釜次郎だ、釜次郎は節藏よりか少し遲れて此方に歸て來て同じく糺問所の手に掛て居る、所が頓と音づれが分らない、と云ふのは私は榎本と云ふ男は知て居るとは知て居る、途中で遇て一寸挨拶したぐらゐな事はあるが一緒に相對して共に語り共に論ずると云ふやうな深い交際はない、だから餘り氣に止めて居なかつた、所が此榎本と云ふ一體の大本を云ふとあの阿母さんと云ふ人は素と一橋家の御馬方で林代次郎と云ふ日本第一乘馬の名人と云はれた大家の娘で此婦人が幕府の御徒士の榎本圓兵衛と云ふ人に嫁して設けた次男が榎本釜次郎ですソコで其林の家と私の妻の里の家とは同緣の遠い續合ひになつて居るから、ソレで前年中は榎本の家內の者も此方に來たことがある又私の妻も小娘のときには祖母さんに連られて榎本の家に行つたとがあると云ふので少し往來の道筋が通て居て全く知らぬ人でない

所が榎本が今度糺問所の手に掛て居て其節榎本の阿母さんも姉さんもお内儀さんも静岡に居るが一向釜次郎の處から便りがないので大に案じて居ると丁度其時に榎本の妹の良人に江連加賀守と云ふ人があつて此人は素と幕府の外國奉行を勤めて居て私は外國方の飜譯方であつたから能く知て居るソコで江連が静岡から私の處に手紙を寄越して榎本は此節どうして居るだらうか頓と便りがないので母も姉も家内も日夜案じて居る何でも江戸に來て居ると云ふ噂は風の便りに聞たけれどもソレも確めることが出來ない、其れに就て江戸に親戚身寄の者に問合せたけれども嫌疑を恐れてか只の一度も返辭を寄越した者がないソコで君の處に聞きに遣たら何か樣子が分るだらうと思ふがドウぞ知らして呉れぬかと云ふことを縷々と書て來ました所で私は其手紙を見て先づ立腹したと申すは榎本は兎も角も其親戚身寄の者が江戸に居ながら嫌疑を恐れて便りをしないとは卑劣な奴だ、薄情な奴だ、實に幕府の人間は皆こんな者だ、好し乃公が一人で引受けて遣ると云ふ心が頭に浮んで來て加ふるに私は古川節藏の一件で糺問所の樣子を知て居るからスグ江連の方へ返辭を出し榎本は今糺問所に這入て居る殺されるか助かるかソリャどうも分らない、分らないけれども何しろ煩ひもしなければ何もせずに無事に居るので御座る其事を阿母さん始め皆さんへ傳へて呉れよと云て遣ると又重ねて手紙を寄越して老母と姉が東京に出たいと云ふが上京しても宜しからうかと云て來たから頻々と御出なさい私方に嫌疑もなんにもない公然と出て御出でなさいと返辭をすると間もなく老人と姉さんと母子二人出京してソレから糺問所の樣子も分り差入物などして居る中に阿母さんが是非釜次郎に逢ひたいと云出した所が法律も何もない世

の中で何處に訴へて如何しやうと云ふ方角が分らないソコで私が一案を工風して老母から哀願書を差出すとにして私が認めた案文の其次第は云々今般伜釜次郎犯罪の儀誠に以て恐れ入ります同人事は實父圓兵衛存命中斯樣々々至極孝心深き者で父に事へて平生は云々又其病中の看病は云々私は現在ソレを見て居ます此孝行者に此不忠を犯す筈はない彼れに限て惡い根性の者では御在ませんドウゾ御慈悲に御助けを願ひます私はモウ餘命もない者で御座るからいよ〳〵釜次郎を刑罰とならば此母を身代りとして殺して下さいと云ふ趣意で分らない理屈を片言交りにゴテ〳〵厚かましく書て姉さんのお樂さんに清書をさせてソレからお婆さんが杖をついて哀願書を持て糺問所に出掛けた處がコレは餘程監守の人を感動さしたと見え固よりこんな事で罪人の助かる譯けはないがとう〳〵仕舞に獄窓を隔てゝ母

子面會だけは叶ひました、夫れ是れする中に爰に妙な都合の宜い事が出來ました其次第は榎本が箱館で降參のとき自分が嘗て和蘭在留中學び得たる航海術の講義筆記を秘藏して居る其筆記の蘭文の書を國の爲めにとて官軍に贈て其書が官軍の將官黑田良助(黑田清隆)の手にあると云ふことを聞きました、所で人は誰か忘れたが或日其書を私方に持參して何の書だか分らぬが此蘭文を飜譯して貰ひたいと云ふから之を見れば兼て噂に聞た榎本の講義筆記に違ひない是れは面白いと思ひ蘭文飜譯は易いことであるのを私は先方に氣を揉ませる積りで態と手を着けない初めの方四五枚だけ丁寧に分るやうに飜譯して原本に添へて返して遣て是れは如何にも航海にはなくてはならぬ有益な書に違ひない卷初の四五枚を見ても分る所が版本の原書なれば飜譯も出來るが講義筆記であるから其講義を聽聞した本人でなけれ

ば何分にも分り兼ねる誠に可惜い寶書で御座ると云て私は榎本の筆記と知りながら知らぬ風をして唯飜譯の云々で氣を揉まして自然に榎本の命の助かるやうに云はゞ伏線の計略を運らした積りである又其時代には黒田も私方に來れば私も黒田の家に行たこともある何時か何處か時も處も忘れましたが私が黒田に寫眞を贈たことがある其寫眞は亞米利加の南北戰爭、南部敗北のとき南部の大統領か大將か何でも有名の人が婦人の着物を着て逃げ掛けて居る寫眞で私がその前年亞米利加から持て歸て一枚あつたから黒田に贈て「是れは亞米利加の南部の何と云ふ人で逃げる時に斯う云ふ姿で逃げたと云ふ敢て命を惜むでもなからうけれども又一方から云へば命は大切な者だ何としても助からうと思へば斯く見苦しい姿をしても逃げるのが當然の道である人間と云ふものは一度び命を取れば後で幾ら後悔しても取返しが付かない、ドウも榎本は大變な騒ぎをした男であるが命だけは取らぬやうにした方が得ぢやないか何しろ此寫眞を進上するから御覽なさい」と云て濃に話したこともある爾うした所でドウやら斯うやらする間にいよ〳〵助かることになつたけれども其助かると云ふのは固より私の周旋したばかりで助かつたと云ふ譯けではない其時の眞實内情の噂を聞けば長州勢はドウも榎本等を殺すやうな勢があつたソコで薩州の藩士がソレを助けやうと云ふ意味があつたと云ふから長州勢に任かせたら或は殺されたかも知れぬ何れ大西郷などがリキンでとう〳〵助かるやうになつたのでせう是れは私の爲めに大童信太夫よりか餘程骨の折れた仕事でした彼れ此れする中に私が煩ひ付て其事は病後まで引張て居て病氣全快に及ぶと云ふときだから明治三年にいよ〳〵放免になりましたが唯殘念で氣の毒なのは阿母さ

んは愛子の出獄前に病死しました

所が前申す通り榎本釜次郎と私とは刎頸の交と云ふ譯けではなし何もそんなに力を入れる程の深切のあらう譯けもない只仙臺藩士の腰拔けを憤つたと同じ事で幕府の奴の如何にも無氣力不人情と云ふことが癪に障たのでソコでどうでも斯うでも助けて遣らうと思て駈廻はりましたが其節毎度妻と話をして今でも覺えて居ます私の申すに扨榎本の爲めに今日は此通りに骨を折て居るが是れは唯人間一人の命を助けるばかりの志で外になんにも趣意はない元來榎本と云ふ男は深く知らないが隨分何かの役に立つ人物に違ひはない少し氣色の變た男ではあるが何分にも出身が幕府の御家人だから殿樣好きだ今こそ牢に這入て居るけれども是れが助かつて出るやうになれば後日或は役人になるかも知れぬ其時は例の通りの殿樣風でぴん〳〵する

やうな事があるかも知れない其時になつて殿樣のぴん〳〵を見たり聞たりしてヤレ昔を忘れて厚かましいだの可笑しいだのと云ふ念が兎の毛ほども腹の底にあつては是れは榎本の惡いのでなく此方の卑劣と云ふものだから、そんな事なら私は今日唯今から一切の周旋を止めるがドウだと妻に語れば妻も私と同說で左樣な淺ましい卑しい了簡は決してないと申して夫妻固く約束したことがあるが後日に至て私の云た通りになつたのが面白い榎本が段々立身して公使になつたり大臣になつたりして立派な殿樣になつたのは私が占八卦の名人のやうだけれども私の處にはチャンと說が極まつて居て一切の事情を知る者は私と妻と兩人より外にないから榎本がドウならうと私の家で噂をする者もない子供などは今度の此速記錄を見て始めて合點するでせう

一身一家經濟の由來

是れから私が一身一家の經濟の事を陳べませう凡そ世の中に何が怖いと云ても暗殺は別にして借金ぐらゐ怖いものはない他人に對して金錢の不義理は相濟まぬ事と決定すれば借金はます〳〵怖くなります私共の兄弟姉妹は幼少の時から貧乏の味を嘗め盡して母の苦勞した樣子を見ても生涯忘れられません貧小士族の衣食住その艱難の中に母の精神を以て自から私共を感化した事の數々ある其一例を申せば私が十三四歳のとき母に云付けられて金子返濟の使をしたことがあります其次第柄は斯う云ふことです、天保七年大阪に於て私共が亡父の不幸で母に從て故郷の中津に歸りましたとき家の普請をすると か何とか云ふに勝手向は勿論不如意ですから人の世話で賴母子講を

拵へて一口金二朱づゝで何兩とやら纏まつた金が出來て一時の用を辨じて其後毎年幾度か講中が二朱づゝの金を持寄り鬮引にて滿座に至りて皆濟になる仕組であるが大家の人は二朱計りの金の爲めに何年もこんな事に關係して居るのは面倒だと云ふ所から一時二朱の掛金を出したまゝに手を引く者がある之を掛棄と云ひます其實は講主が人に金を唯貰ふやうな事なれども一般の風俗で左まで世間に怪しむ者もない所が福澤の賴母子に大阪屋五郎兵衞と云ふ廻船屋が一口二朱を掛棄にしたさうです勿論私の三四歳頃か幼少の時の事で何も知りませんでしたが十三四歳のとき或日母が私に申すに「お前は何も知らぬ事だが十年前に斯う〳〵云ふ事があつて大阪屋が掛棄にして福澤の家は大阪屋に金二朱を貰ふたやうなものだ、誠に氣に濟まぬ、武家が町人から金を惠まれて夫れを唯貰ふて默て居ることは出來ませ

ん疾うから返したい〳〵と思ては居たがドウも爾う行かずにヤッと今年は少し融通が付たから此二朱のお金を大阪屋に持て行て厚う禮を述べて返して來い」と申して其金を紙に包んで私に渡しましたソレから私は大阪屋に參て金の包みを出すと先方では意外に思ふたか「御返濟など却て痛入ります最早や古い事です、決してそんな御心配には及びません」と云て頻りに辭退すれども私は母の云ふことを聞て居るから是非渡さねばならぬと互に押し返して口喧嘩のやうに爭ふて金を置て歸たことがあります今はハヤ五十二三年も過ぎてむかし〳〵の事であるが其とき母に云付けられた口上も先方の大阪屋の事もチャンと記憶に存して忘れません年月日は覺えないが何でも朝のこと丶思ふ豊前中津下小路の西南の角屋敷大阪屋五郎兵衛の家に行て主人五郎兵衛は留守で弟の源七に金を渡したと云ふことまで覺えて居ますこんなことが少年の時から私の腦中に遺て居るから金錢の事に就ては何としても大膽な横着な擧動は出來られませんソレから段々成長して中津に居る間は漢學修業の傍に内職のやうな事をして多少でも家の活計を助け畑もすれば米も搗き飯も炊き鄙事多能、あらん限りの辛苦して貧小士族の家に居り年二十一のとき始めて長崎に行て勿論學費のあらう譯けもない、寺の留守番をしたり砲術家の食客になつたりして不自由ながら蘭學を學んで其後大阪に出て大阪の緒方先生の塾に修業中も相替らず金の事は恐ろしくて唯の一度でも他人に借りたことはない、人に借用すれば必ず返濟せねばならぬ、當然のことで分り切て居るから其返濟する金が出來る位ならば出來る時節まで待て居て借金はしないと斯う覺悟を極めてソコで二朱や一分は扨置き百文の錢でも人に借りたことはない、チャンと自分の金の出來るま

で待て居る夫れから又私は質に置たことがない着物は塾に居るとき
も故郷の母が夏冬手織木綿の品を送て呉れましたがソレを質に置く
と云へば何時か一度は請還さなければならぬ請還す金があるなら其
金の出來るまで待て居るが宜いと斯う思ふから金の入用はあつても
只の一度も質に入れたことがない、けれどもいよ〳〵金に迫て如何し
てもなくてならぬと云ふときか、耻かしい事だが酒が飲みたくて堪ら
ないと云ふやうなことがあれば思切て其着物を賣て仕舞ひます例へ
ば其時に浴衣一枚を質に入れゝば貳朱貸して呉れる、之を手離して賣
ると云へば貳朱と貳百文になるから賣ることにすると云ふやうな經
濟法にして且つ又私は寫本で錢を取ることもしない大事な修業の身
を以て錢の爲めに時を費すは勿體ない吾身の爲めには一刻千金の時
である、金がなければ唯使はぬと覺悟を定めて大阪に居る間とう〳〵

一錢の金も借用したことなくして其後江戸に來ても同樣、假初にも人
に借用したことはない折節自分で想像しては唯怖くて堪らない、借金
が出來て人から催促されたら如何だらう世間の人朋友の中にも毎度
ある話だ借金が出來て返さなければならぬと云て此方から借りては
彼方に返し又彼方から借りては此方に返すと云ふ者があるが私は少
しも感服しない誠に氣の濟まぬ話で金を借りて返さなくてならぬな
んて嘸忙しい事であらう能くもアレで一日でも半日でも安んじて居
られたものだと思ふて殆んど推量が出來ない一口に云へば私は借金
の事に就て大の臆病者で少しも勇氣がない人に金を借用して其催促
に逢ふて返すことが出來ないと云ふときの心配は恰も白刃を以て後
ろから追蒐けられるやうな心地がするだらうと思ひますソコで私が金
を大事にする心掛けの事實に現はれた例を申せば江戸に參てから下

谷練塀小路の大槻俊齋先生の塾に朋友があつて私は其時鐵砲洲に居たが其朋友の處へ話に行て夜になつて練塀小路を出掛けて和泉橋の處に來ると雨が降出した、こりやドウも困たことが出來た迚も鐵砲洲までは行かれないと思ふと和泉橋の側に辻駕籠が居たから其駕籠屋に鐵砲洲まで幾らで行くかと聞たら三朱だと云ふドウも三朱と云ふ金を出して此駕籠に乘るは無益だ此方は足があるソレは乘らぬことにして其少し先きに下駄屋が見えるから下駄屋へ寄て下駄一足に傘一本買て兩方で二朱餘り三朱出ない、夫れから雪駄を懷に入れて下駄を穿て傘をさして鐵砲洲まで歸て來た、デ其途中私は獨り首肯き此下駄と傘が又役に立つ駕籠に乘たつて何も後に殘るものはないこんな處が愼しむ可きことだと思たことがありますマア其位に注意して居たから外は推して知るべし一切無駄な金を使たことがない紙入に金

を入れて置くソレは二分か三分か入れてある、入れてあるけれども何時まで經ても其金のなくなつたことがない酒は固より好きだから朋友と酒を飲みに行くことはあるソンな時には金も入りますが唯獨りでブラリと料理茶屋に這入て酒を飲むなぞと云ふことは假初にもしたことがないソレ程に私が金を大事にするから又同時に人の金も決して貪らないソリャ以前奥平家に對して朝鮮人を氣取たのは別な話にして其外と云ふのは決して金は貪らないと自身獨立自力自活と覺悟を極めました

ソコで以て慶應三年卽ち王政維新の前年の冬芝新錢座に有馬家(大名)の中屋敷が四百坪ばかりある其屋敷を私が買ひました徳川の昔からの法律に依ると武家屋敷は換へ屋敷を許しても賣買は許さないと云ふのが掟であつた、所が徳川も其末年になると樣々な根本的改革と云

ふやうな事が行はれて武家屋敷でも代金を以て賣買勝手次第と云ふことになつて新錢座の有馬の中屋敷が賣物になると人の話を聞て同じ新錢座住居の木村攝津守の用人大橋榮次と云ふ人に周旋を賴んで其有馬屋敷を買ふことに約束して價は三百五十五兩その時の事だから買ふと云た所が武家と武家との間で手金だの證書取換せなどゝ云ふことのあらう譯けはない唯賣りませう然らば卽ち買ひませうと云ふ丈けの話で約束が出來て其金の受取渡しは何時だと云ふと十二月二十五日に金を相渡し申す請取らうとチャンと約束が出來て居て夫れから私は其前日三百五十五兩の金を揃へて風呂敷に包んで翌早朝新錢座の木村の屋敷に行て見ると門が締て潛戸まで鎖してある夫れから門番に「此處を明けて呉れ何で締めて置くか」と云ふと「イーエ此處は明けられません」「明けられませんたつて福澤だ」と云ふのは私は亞米

利加行の由緣で木村家には常に出入して家の者のやうにして居たから門番も福澤と聞て潛戸を明けて呉れたは呉れたが何だか門前が騷々しいドタバタ遣て居る、何事か知らんと思て南の方を見ると眞黑な烟が立て居るソレで木村の玄關に上て大橋に遇て「大變騷々しいが何だ」と云ふと大橋がヒソ〳〵して「お前さんは何も知らぬか大變な事が出來ました大騷動だ酒井の人數が三田の薩州の屋敷を燒拂はうと云ふ、ドウもそりや大騷動、戰爭で御座る」と云ふから私も驚いて「ソリヤ少しもしらなかつた成程ドウも容易ならぬ形勢だが夫れは夫れとして時にあの屋敷の金を持て來たから渡してお呉んなさい」と云ふと大橋が「途方もない屋敷どころの話ぢやない、何の事だモウこりや江戸中の屋敷が一錢の價なしだ、ソレを屋敷を買ふなんてソンな馬鹿らしい事は一切罷めだ、マアそんな事を爲なさるな」と云て取合ぬから私は不承

知だ「ソリヤ爾うでない今日渡と云ふ約束だから此金は渡さなくてはならぬ」と云ふと大橋は脇の方に向て「約束したからと云て時勢に依たものだ此大變な騒動中に屋敷を買ふと云ふやうな馬鹿氣たことがあるものか假令今買へばと云ても三百五十五兩を半價にしろと云へば半價にするに違ひない只の百兩でも悦んで賣るだらう兎に角に見合せだ、罷めだ〳〵」と云て相手にならぬから私は押返して「イヤそれは出來ません大橋さん能くお聞きなさい先達これを有馬から買はうと云ふときに何と貴方は約束なすつたか只十二月の廿五日卽ち今日金を渡さう受取らうとソレより外に何にも約束はなかつた若し萬が一世の中に變亂があれば破約する、其價を半分にすると云ふ言葉が約束の中にあるかないかと云ふにそんな約束はないではないか、假令ひ約條書がなからうと人と人と話したのが何寄の證據だ賣買の約束をした以

上は當然に金を拂はぬこそ大きな間違ひだ何でも拂はんければならぬ加之ならずマダ私が云ふことがある若し大橋さんの言ふ通りに此三百五十五兩を半價にせよとか百兩にせよとか云へば時節柄有馬家では承知するであらうソコで私が三百五十五兩の物を百兩に買たと斯うした所で此變亂がどんなになるか分らない今あの通り酒井の人數が三田の薩州屋敷を燒拂て居るが是れが何でもない事で天下泰平、安全の世の中になるまいものでもない扨いよ〳〵天下泰平になつて私が彼の買屋敷の内に住ひ込んで居る、スルと有馬の家來も大勢あるから私の處の門前を通る度に睨んで通るだらう彼の屋敷は三百五十五兩の約束をしたが金の請取渡しの其日に三田に大變亂があつた其爲めに百兩で賣た福澤は二百五十五兩得をして有馬家では二百五十五兩損をしたと通る度に睨んで通るに違ひない口に言はないでも心

に爾う思て忌な顔をするに極て居る私はソンな不愉快な屋敷に住まうと思はない、何は扨置き構ふことはないドウぞ此金を渡して下ださい皆無損をしても宜しい、此金を唯渡した計りで其屋敷に住まふどころではない逃出して行くと云ふやうな大騒動があるかも知れない、有ればあつた時の話だ、人間世界の事は何が何やら分らない確かに生きて居ると思ふ人が死んだりする矧んや金だ、渡さなければならぬと捩くれ込んで到頭持て行て貰ひました爾う云ふ譯けで誠に私が金と云ふことに就て極めて律義に正しく遣て居たと云ふのは是れは矢張り昔の武家根性で金錢の損得に心を動かすは卑劣だ氣が餒ゑると云ふやうな事を思たものと見えます

それに又似寄たことがある明治の初年に横濱の或る豪商が學校を拵へて此慶應義塾の若い人を敎師に賴んで其學校の始末をして居ました爾うすると其主人は私に親から新塾に出張して監督をして貰ひたいと云ふ意があるやうに見える、私の家には其とき男子が二人娘が一人あつて兄が七歳に弟が五歳ぐらゐ、是れも追々成長するに違ひない、成長すれば外國に遊學させたいと思て居る所が世間一般の風を見るに學者とか役人とか云ふ人が動もすれば政府に依賴して自分の子を官費生にして外國に修業させることを祈てドウやら斯うやら周旋が行屆て目的を達すると獲物でもあつたやうに悅ぶ者が多い嗚呼見苦しい事だ自分の產んだ子ならば學問修業の爲めに洋行させるも宜しいが貧乏で出來なければ爲せぬが宜しい夫れを乞食のやうに人に泣付て修業をさせて貰ふとは扨も〳〵意氣地のない奴共だと心竊に之を愍笑して居ながら私にも男子が二人ある此子が十八九歳にもなれば是非とも外國に遣らなければならぬが先だつものは金だどうかし

て其金を造り出したいと思へども前途甚だ遙なり二人遣て何年間の學費は中々の大金、自分の腕で出來やうか如何だらうか誠に覺束ない困たことだと常に心に思て居るから敢て愧ることでもなし颯々と人に話して「金が欲しい金が欲しいドウかして洋行をさせたい今この子が七、歳だ五歳だと云ふけれどもモウ十年經てば仕度をしなければならぬドウもソレまでに金が出來れば宜いが」と人に話して居ると誰か其話を例の豪商にも告げた者があるか或日私の處に來て商人の云ふにお前さんに彼の學校の監督をお賴み申したい斯く申すのは月に何百圓とか其月給を上げるでもない態々月給と云ては取りもしなからうが茲に一案があります、外ではないお前さんの子供兩人彼のお坊ッちやん兩人を外國に遣る其修業金になるべきものを今お渡し申すが如何だらう此處で今五千圓か一萬圓ばかりの金をお前さんに渡す、所

で今要らない金だからソレを何處へか預けて置く、預けて置く中に子供衆が成長する、成長して外國に行かうと云ふときには其金も利倍增長して確かに立派な學費になつて不自由なく修業が出來ませう此御相談は如何で御座ると云ひ出した、成程是れは宜い話で此方はモウ實に金に焦れて居る其最中に二人の子供の洋行費が天から降て來たやうなもので即刻應と返辭をしなければならぬ處だが私は考へました、待て雲時、どうも爾うでない抑も乃公が彼の學校の監督をしないと云ふものは爲ない所以があつて爲ないとチャンと說を極めて居るソコで今金の話が出て來て其金の聲を聞き前說を變じて學校監督の需に應じやうと云へば前に之を謝絕したのが間違ひかソレが間違ひでなければ今その金を請取るのが間違ひである、金の爲めに變說と云へば金さへ見れば何でもすると斯う成らなければならぬ、是れは出來ない、

且つ又今日金の欲しいと云ふのは何の爲めに欲しいかと云へば子供の爲めだ子供を外國で修業させて役に立つやうに爲やう、學者に爲やうと云ふ目的であるが、子を學者にすると云ふ事が果して親の義務であるかないか是れも考へて見なければならぬ、家に在る子は親の子に違ひない、違ひないが衣食を授けて親の力相應の教育を授けてソレで澤山だ如何あつても最良の教育を授けなければ親たる者の義務を果さないと云ふ理窟はない、親が自分に自から信じて心に決して居る其說を子の爲めに變じて進退すると云ては所謂獨立心の居處が分らなくなる、親子だと云ても親は親、子は子だ、其子の爲めに節を屈して子に奉公しなければならぬと云ふことはない、宜しい今後若し乃公の子が金のない爲めに十分の教育を受けることが出來なければ是れは其子の運命だ幸にして金が出來れば教育して遣る、出來なければ無學文盲

のまゝにして打遣て置くと私の心に決斷して扨先方の人は誠に厚意を以て話して呉れたので固より私の心事を知る譯けもないから體能く禮を述べて斷りましたが其問答應接の間私は眼前に子供を見て其行末を思ひ又顧みて自分の身を思ひ一進一退これを決斷するには隨分心を惱ましました其話は相濟み其後も相替らず眞面目に家を治めて著書飜譯の事を勉めて居ると存外に利益が多くてマダ其二人の子供が外國行の年頃にならぬ先きに金の方が出來たから小供を後廻しにして中上川彦次郎を英國に遣りました彦次郎は私の爲めに只た一人の甥で彼方も亦只た一人の叔父さんで外に叔父はない私も亦彦次郎の外に甥はないから先づ親子のやうなものです彼れが三四年も英國に居る間には隨分金も費しましたがソレでも後の子供を修業に遣ると云ふ金はチャンと用意が出來て二人とも亞米利加に六年ばかり

遣て置きました私は今思ひ出しても誠に宜い心持がします能くあの時に金を貰はなかつた貰へば生涯氣掛りだが宜い事をしたと今日までも折々思ひ出して大事な玉に瑾を付けなかつたやうな心持がします

右様な大金の話でない極々些細の事でも一寸と胡麻化して貪るやうなことは私の蟲が好かない明治九年の春私が長男一太郎と次男捨次郎と兩人を連れて上方見物に行くとき一は十二歳餘り捨は十歳餘り父子三人從者も何もなしに横濱から三菱會社の郵便船に乗り船賃は上等にて十圓か十五圓、規則の通りに拂ふて神戸に着船、金場小平次と云ふ兼て懇意の問屋に一泊ソレから大阪京都奈良等諸所見物して神戸に歸て來て復た三菱の船に乗込むとき問屋の番頭に頼んで乗船切符を買ひサア乗込みと云ふときに其切符を請取て見れば大人の切符が一枚と子供の半札が二枚あるから番頭を呼んで先刻申した通り切符は大人が二枚小供が一枚の筈だ何かの間違ひであらう、替へて貰ひたいと云ふと番頭は落付拂ひ「ナーニ間違ひはありません大きいお坊ッちやんの御年も御誕生も聞きました正味十二と二三ヶ月、半札は當然です規則には滿十二歳以上なんで大人の船賃を拂ふ者は一人もありはしません」と云ふから私は承知しない「二三ヶ月でも二三日でも規則は規則だ是非規則通りに拂ふ」と云ふと番頭も中々剛情で「ソンな馬鹿な事は致しません」と云て議論のやうに威張るから「何でも宜しい乃公は乃公の金を出して拂ふものを拂ひ、貴様には唯その周旋を頼む丈けだ何も云はずに呉れろ」と申して何圓か金を渡して乗船前忙しい處に切符を取替へた事がある是れは何も珍らしくない買物の代を當然に拂ふまでの事だから世間の人も

左様であらうと思ふけれども今日例へば汽車に乘て見ると青い切符を以て一寸と上等に乘込む人もあるやうだ過日も横濱から例の青札を以て上等に飛込み神奈川に上た奴がある私は箱根歸りに丁度その列車に乘て居てソッと奴の手に握てる中等切符を見て扨々賤しい人物だと思ひました

是れまで申した所では何だか私が潔白な男のやうに見えるが中々爾うでない此潔白な男が本藩の政廳に對しては不潔白とも卑劣とも名狀す可らざる擧動をして居ました話は少々長いが私が金錢の事に付き數年の間に豹變した其由來を語りませう王政維新の其時に幕府から幕臣一般に三箇條の下問を發し第一王臣になるか第二幕臣になつて靜岡に行くか第三歸農して平民になるかと云て來たから私は無論歸農しますと答へて其時から大小を棄てゝ丸腰になつて仕舞ひソコ

で是れまで幕府の家來になつて居るとは云ひながら奥平からも扶持米を貰て居たので幕臣でありながら半ばゝ奥平家の藩臣である然るに今度いよ〳〵歸農と云へば勿論幕府の物を貰ふ譯けもないから同時に奥平家の方から貰て居る六人扶持か八人扶持の米も御辭退申すと云て返して仕舞ひました、と申すは其時に私の生活はカッ〳〵出來るか出來ないかと云ふ位であるが併しドウかしたなら出來ないことはないと大凡その見込が付て居ました前にも云ふ通り私は一體金の要らない男で一方では多少の著譯書を賣て利益を收め又一方では頓と無駄な金を使はないから多少の貯蓄も出來て赤貧ではない是れから先き無病堅固にさへあれば他人の世話にならずに衣食して行かれると考を定めてソレで男らしく奥平家に對しても扶持方を辭退しました、スルと奥平の役人達は却て之を面白く思はぬ「ソンなにしなくて

も宜い、是れまで通り遣らう」と云て其押問答がなか〳〵喧ましい、妙なもので此方が貰はうと云ふときには容易に呉れぬものだが要らないと云ふと向ふが頻りに強ふる、ソレで仕舞にはドウもお前は不深切だモウ一歩進めると藩主に對して薄情不忠な奴だと云ふまでになつて來た夫れから此方も意地になつて「ソレなら戴きませう、戴きませうだが毎月其扶持米を精げて貰ひたい、モ一つ序でに其米を飯か粥に焚て貰ひたい、イヤ毎月と云はずに毎日貰ひたい、都ての失費は皆米の内で償ひさへすれば宜いから爾うして貰ひたい、ソレでドウだと申すに御扶持を貰はなければ不深切不忠と云はれる不忠の罪を犯すまでにして御辭退申す程の考はないから慎んで戴きます願の通り其御扶持米が飯か粥になつて來れば私は新錢座私宅近處の乞食に觸を出して毎朝來い喰はして遣ると申して私が殿様から戴いた物を私宅の門前に於て難澁者共に戴かせます積りですと云ふやうな亂暴な激論で役人達も困たと見えとう〳〵私の云ふ通りに奥平藩の縁も切れて仕舞ひました

斯う云へば私が如何にも高尚廉潔の君子のやうに見えるが此君子の前後を丸出しにすると實は大笑ひの話だ是れは私一人でない同藩士も同じことだ、イヤ同藩士ばかりでない、日本國中の大名の家來は大抵皆同じことであらう、藩主から物を貰へば拜領と云て之に返禮する氣はない、馳走になれば御酒下されなんと云て氣の毒にも思はず唯難有いと御辭儀をするばかりで其實は人間相互ひの附合ひと思はぬから金錢の事に就ても亦その通りでなければならぬ私が中津藩に對する筆法は金の辭退どころか唯取ること許り考へて何でも構はぬ取れる丈け取れと云ふ氣で一兩でも十兩でも旨く取出せば何だか獵に行て

獲物のあつたやうな心持がする、拜借と云て金を借りた以上は此方のものを返すと云ふ念は萬々ない假初にも自分の手に握れば借りた金も貰た金も同じことで後の事は少しも思はず義理も廉恥もない其有様は今の朝鮮人が金を貪ると何にも變たことはない嘘も吐けば媚も献じ散々なことをして藩の物を只取らう〳〵とばかり考へて居たのは可笑しい其二三ヶ條を云へば小幡其外の人が江戸に來て居て私が一切引受けて世話をして居るときに藩から勿論ソレに立行く丈けの金を呉れやう譯けはない、ドウやら斯うやら種々様々に私が有らん限りの才覺をして金を造た例へば當時横濱に今のやうな歐字新聞がある一週に一度づゝの發行、其新聞を取寄せてソレを飜譯しては佐賀藩の留守居とか仙臺藩の留守居とか其外一二藩もありましたソンな人に話を付けてドウぞ飜譯を買て貰ひたいと云て多少の金にするやう

な工風をしたり又は私が外國から持て歸た原書の中の不用物を賣たりして金策をして居ましたが何分大勢の書生の世話だから其位の事では迚も追付く譯けのものでない所で其時江戸の藩邸に金のあることを聞込んだから即案に宜い加減な事を書立て何月何日の頃何の事で自分の手に金の這入る約束があると云ふやうな嘘を拵へて誠めかしく家老の處に行て散々御辭儀をして斯う〳〵云ふ譯けですから暫時百五十兩丈けの御振替を願ひますと極手輕に話をすると家老は逸見志摩と云ふ誠に正しい氣の宜い人で暫時のことならば拜借仰付られても宜からうと云ふやうな曖昧な答をしたから其答を聞くや否やすぐに其次ぎの元締役の奉行の處に行て今御家老志摩殿に斯う云ふ話をした所が貸して苦しくないと御聞濟になつたから今日その御金を請取りたいと云ふと奉行は不審を抱きソレは何時の事だか知ら

ぬがマダ其筋から御沙汰にならぬと妙な顔色して居るから假令ひ御沙汰にならぬでもモウ事は濟んで居ます唯金をさへ渡して下されば宜しい何も六かしい事はないと段々説た、所が家老衆が爾う云へば御金のないことはない餘り不都合でもなからうと其答も曖昧であつたが此方はモウ濟んだ事にして仕舞て其足で又其下役の元締小吟味、是れが眞實その金庫の鍵を持て居る人である其小吟味方の處へ行て只今金を出して貰ひたい斯う〳〵云ふ次第で決してお前さんの落度になりはしない正當な手順で僅か三ケ月經てば私の手にちやんと金が出來るからすぐに返上すると云て何の事はない疾雷耳を掩ふに遑あらず役人と役人と評議相談のない間に百五十兩と云ふ大金を掠めて持て來た其時は恰も手に龍宮の珠を握りたるが如くにして且つ其握た珠を龍宮へ返へさうなんと云ふ念は毛頭ない誠に不埒な奴さ夫れ

で以て一年ばかり大に樂をしたことがあります

又或る時家老奥平壹岐の處に原書を持參して御買上を願ふと持込んだ所が此家老は中々黒人、その原書を見て云ふに「是れは宜い原書だ大層高價のものだらう」と頻りに賞めるから此方はチヤンと向ふの腹を知て居る有益な本で實價は安いなどゝ威張て出掛けるとソレぢや外へ持て行けと云ふに極て居るから一番その裏を搔て「左樣です原書は誠に必要な原書ですが之を私が奥平樣にお買上げを願ふと云ふのは此代金を私が請取て其金は私が使て爾うして其御買上げになつた原書を私が拜借しやうと斯う云ふので正味を申せば私がマア金を唯貰はうと云ふ策略でござる斯くの通り平たく心の實を明らさまに申上げるのだからドウか此原書を名にして金を下さい一口に申せば私は體の宜い乞食お貰ひ見たやうなものでござる」と打付けた所が家老も

仕方がない其譯けは家老が以前に自分の持て居る原書一冊を奥平藩に二十何兩かで賣付けたことがある其事を聞込んだから私が行たので若しも否めばお前さんはドウだと暴れて遣らうと云ふ强身の伏線がある丸で脅迫手段だから家老も仕方なしに承知して私も矢張り其原書を名にして先例に由り二十何兩かの金を取て其内十五兩を故郷の母の方に送て一時の窮を凌ぎましたと云ふやうな次第でソレはソレは卑劣とも何とも實に云ひやうのない惡い事をして一寸とも愧ぢない假初にも是れはドウも有間敷事だなんと思たことがない取らないのは損だとばかり獵に行けば雀を擊たより雁を取た方がエライと云ふ位の了簡で旨く大金を掠め取れば心窃に誇て居るとは實に淺ましい事であるのみならず本來私の性質がソレ程卑劣とも思はない隨分家風の惡くない家に生れて幼少の時から心正しき母に育てられて

苟も人に交て貪ることはしないと說を立てゝ居る者が何故に藩廳に對してばかり斯くまでに破廉耻なりしや頓と譯けが分らぬ、シテ見ると人間と云ふ者はコリヤ社會の虫に違ひない、社會の時候が有りのまゝに續けば其虫が虫を產んで際限のない所に此蛆虫卽ち習慣の奴隸が不圖面目を改めると云ふには社會全體に大なる變革激動がなければならぬと思はれるソコで三百年の幕府が潰れたと云へば是れは日本社會の大變革で隨分私の一身も始めて夢が醒めて藩廳に對する擧動も改まらなければならぬ是れまで自分が藩廳に向て愧づ可き事を犯したのは畢竟藩の殿樣など云ふ者を崇め奉つて其極度は其人を人間以上の人と思ひ其財產を天然の公共物と思ひ知らず識らず自から鄙劣に陷りしことなるが是れからは藩主も平等の人間なりと一念こゝに發起して此平等の主義からして物を貪るは男子の事に非ずと云

ふ考へが浮かんだのだらうと思はれる其時には特に考へたこともない說を付けたこともないが私の心の變化は恐ろしい、何故に以前藩に對してあれほど卑劣な男が後に至ては折角呉れやうと云ふ扶持方をも一酷に辭退したか、辭退しなくつても世間に笑ふ者もないのに打て變た人物になつて此間まで丸で朝鮮人見たやうな奴が恐ろしい權幕を以て呉れる物を刎返して伯夷叔齊のやうな高潔の士人に變化したとは何と激變ではあるまいか、他人の話ではない私が自分で自分を怪しむことであるが畢竟封建制度の中央政府を倒して其倒るゝと共に個人の奴隸心を一掃したと云はなければならぬ之を大きく論ずれば彼の支那の事だ支那の今日の有樣を見るに何としても滿淸政府をあの儘に存して置て支那人を文明開化に導くなんと云ふことはコリや眞實無益な話だ何は扨置き老大政府を根絶やしにして仕舞てソレから組立てたらば人心こゝに一變することもあらう政府に如何なるエライ人物が出やうとも百の李鴻章が出て來たつて何にも出來はしない其人心を新にして國を文明にしやうとならば何は兎もあれ試みに中央政府を潰すより外に妙策はなからう之を潰して果して日本の王政維新のやうに旨く參るか參らぬか、屹と請合は難けれども一國獨立の爲めとあれば試みにも政府を倒すに會釋はあるまい、國の政府か政府の國か、此くらゐの事は支那人にも分る筈と思ふ

私の經濟話から段々枝がさいて長くなりましたが序ながら中津藩の事に就て、モ少し云ふ事があります前に申す通り私は勤王佐幕など云ふ天下の政治論に少しも關係しないのみならず奥平藩の藩政にまでも至極淡泊にあつたと云ふ其爲めに玆に隨分心に快いことがある、と云ふのはあの王政維新の改革が行はれたときに諸藩の事情を察する

に勤王佐幕の議論が盛で動もすれば舊大臣等に腹を切らせるとか大英斷を以て藩政改革とか云ふ爲めに一藩中に爭論が起り黨派が分れて血を流すと云ふやうなことは何れの藩も十中八九、皆ソレであつた其時に若し私に政治上の功名心があつて藩に行て佐幕とか勤王とか何か云出せば必ず一騷動を起すに違ひない、所が私は默て居て一寸も發言せず人が噂をすれば爾う喧しく云はんでも宜い棄てゝ置きなさいと云ふやうに極淡泊にして居たから中津の藩中が誠に靜で人殺しも何もなかつたのはソレが爲めだらうと思ひます人殺しどころか人を黜陟したと云ふこともなかつたソコで私が明治三年中津に母を迎へに行たとがある、所が其時は藩政も大いに變て居まして福澤が東京から來たから話を聞かうではないかと云ふやうなことになつて家老の邸に呼ばれて行た、所が藩の役人と云ふ有らん限りの役人重役が皆

其處に出て居る、案ずるに私が行たらば嘸ドウも大變な事を云ふだらうと待受けて居たに違ひない夫れから私が其處に出席すると重役達の云ふに藩はドウしたら宜からうか方向に迷て五里霧中なんかんと何か心配さうに話すから私は之に答へてイヤもう是れはドウするにも及ばぬことだ能く諸藩では或は祿を平均すると云ふやうな事で大分騷々しいが私の考へでは何にもせずに今日の此儘で千石取て居る人は千石、百石取て居る人は百石、太平無事に悠々として居るが上策だと其說を詳に陳べると列座の役人は大層驚くと同時に是れは〳〵穩かなことを云ふもの哉と云はぬばかりの趣で大分顏色が宜い夫れから段々話が進んで來た所で私は一つ注文を出した今云ふ通り祿も身分も元の通りにして置くが宜からうソレは宜しいが玆に一つ忠告したいことがある今此中津藩には小銃もあれば大砲もあり武を以て國

を立てやうと云ふ其趣はチャンと見えて居るが併し今の藩士と此藩に在る武器で以て果して戰爭が出來るかドウか私はドウも出來なからうと思ふ左れば今日只今長州の人がズッと暴れ込めば長州に從はなければならぬ又薩州の兵が攻來れば之にも抵抗することが出來ないから薩州に從はなければならぬ誠に心配な話である之を私が言葉を設けて評すれば弱藩罪なし武器災をなすと云はねばならぬ、ダカラ寧そ此鐵砲を皆賣て仕舞ひたい、見れば大砲は何れもクルップだこれを賣れば三千五千或は一萬圓になるかも知れぬから一切賣て仕舞て昔の琉球見たやうになつて仕舞ふが宜い爾うして置て長州から攻めて來たらヘイ〳〵、斯う爲やうとか、アヽ爲やうとか云へばドウか長州に行て直に話をして下さい、又長州ならドウか薩州に行て直談を賴むと云て一切の面倒を他に嫁して此方

はドウでも宜いと斯う云ふ仕向けが宜からう、さうした所で殺しもしなければ捕縛して行きもしないから爾う云ふやうにしたい、さうして一方に於てはドウしても此世の中は文明開化になるに極てるから學校を拵へて文明開化の何物たるを藩中の少年子弟に知らせると云ふ方針を執るが一番大事である扨爾う云ふ方針を執るとして武器を廢して仕舞へば餘り割合が宜過ぎるやうだがソコには斯う云ふことがある今私は東京の事情を察するに新政府は陸海軍を大に改革しやうとして金がなくて困て居るソコで一片の願書なり屆書なり認めて出して見るが宜しい、其次第は此中津藩は武備を慮したる爲めに年々何萬圓と云ふ餘計な金がある此金を納めませうから政府の方でドウでも爲すつて下さいと斯う云へば海陸軍では大に悅ぶ、政府の身になつて見れば此諸藩三百の大名が各々色變りの武器を作り色變りの兵を

備へて置く其始末に堪まるものぢやないドウしたッて一様にしたいと云ふのはコリヤ政府の政略に於て有るに極た譯けではないか然るに此處ではクルップの鐵砲だ隣ではアームストロングの大砲だイヤ彼處では佛蘭西の小銃此方は和蘭から昔し輸入したゲベルを持て居ると云ふやうな日本國中千種萬様の兵備では政府に於てイザ事と云ても戰爭が出來さうにもしないソレよりか其金を納むるが宜い爾うすれば獨り政府が悅ぶのみならずして中津藩も誠に安樂になる所謂一舉兩全の策であるから爾う遣りなさいと云た、所がソレには大反對さ兵事係の役人が三人も四人も居る中で菅沼新五右衞門と云ふ人などは大反對滿坐一致で、ソレは出來ませぬ何の事はない武士に向て丸腰になれと云ふやうな說でソレ計りは何としても出來ないと云ふから私は深く論じもせず出來なければ爲なさるなドウでも宜しい御勝手

になさい只私は爾うしたらば便利だと思ふ丈けの話だからと云てソレ切り罷めになつて仕舞ひましたが併し私は其政治論に熱しなかつたと云ふ爲めに中津の藩士が怪我を爲なかつたと云ふことは是れは事實に於て間違ひないことで自から藩の爲めに功德になつて居ませう其上に中津藩では減祿をしないのみならず平均した所で加增した者がある何でも大變に割合が宜かつた例へば私の妻の里などは二百五十石取て居て三千圓ばかりの公債證書を貰ひ今泉(秀太郎氏なり)は私の妻の姉の家で三百五十石か取て居たが四千圓も貰ひましたらうけれども藩士の祿券と云ふものは惡錢身に付かずと云ふやうな譯けで終にはなくして仕舞て何もありはしない兎に角に中津藩の穩かであつたと云ふことは間違ひない話です

話は以前に立還て復た經濟を語りませう私は金錢の事を至極大切に

するが商賣は甚だ不得手である其不得手とは敢て商賣の趣意を知らぬではない其道理は一通り心得て居る積りだが自分に手を着けて賣買貸借は何分ウルサクて面倒臭くて遣る氣がない且つむかしの士族書生の氣風として利を貪るは君子の事に非ずなんと云ふことが腦に染込んで商賣は愧かしいやうな心持がして是れも自から身に着き纏ふて居るでせう、既に江戸に始めて來たとき同藩の先輩岡見彦曹と云ふ人が和蘭辭書の原書を飜刻して一冊の代價五兩その時には安いもので隨分望む人もある中に私が世話をして朋友に一冊買はせて其代金五兩を岡見に持て行くと主人が金一分、紙に包んで呉れたから驚いた是れは何の事か少しも分らん本の世話をして賣た其禮とは呆れた話だ畢竟主人が少年書生と見縊て金を惠む了簡であらう無禮な事をするもの哉と少し心に立腹して眞面目になつて爭ふた事があると云

ふやうな次第で物の賣買に手數料などゝ云ふことは町人共の話として書生の身には夢ほども知らない左れども是等は唯書生の一身に直接して然るのみ扨經濟の理屈に於ては當時町人共の知らぬ處に考の届くことがある或るとき私が鍛冶橋外の金物屋に行て臺火斗を買て價が十二匁と云ふ其時どう云ふ譯けだか供の者に錢を持たせて十二匁なれば凡そ一貫二三百文になるから其錢を店の者に渡したときに私が不圖心付た此錢の目方は凡そ七八百目から一貫目もある然るに錢の代りに請取た臺火斗は二三百目しかない錢も火斗も同じ銅でありながら通用の貨幣は安くて賣買の品は高い、是れこそ經濟法の大間違ひだ、こんな事が永く續けば錢を鑄潰して臺火斗を作るが利益だ何としても日本の錢の價は騰貴するに違ひないと說を定めて一歩を進めて金貨と銀貨との目方性合を比較して見て西洋の金一銀十五の割

合にすれば日本の貨幣法は間違ひも間違ひか大間違ひで私が首唱して云ふにも及ばず外國の商人は開國その時から大判小判の輸出で利を占めて居るとの風聞ソレから私も知て居る金持の人に頻りに勸めて金貨を買はせた事があるが是れも唯人に話をする許りで自分には何にも爲やうとも思付かぬ唯私の覺えて居るのは安政六年の冬米國行の前或人に金銀の話をして翌年夏歸國して見れば其人が大に利益を得た樣子で御禮に進上すると云て一朱銀の數も計へず私の片手に山盛り一杯金を呉れたから深く禮を云ふにも及ばず何は扨置き早速朋友を連れて築地の料理茶屋に行て思ふさま酒を飲ませたことがある先づ此位なことで其癖私は維新後早く帳合之法と云ふ簿記法の書を飜譯して今日世の中にある簿記の書は皆私の譯例に倣ふて書たものであるダカラ私は簿記の黒人でなければならぬ所が讀書家の考と

齟齬人の考とは別のものと見えて私は此簿記法を實地に活用するとが出來ぬのみか他人の記した帳簿を見ても甚だ受取が惡いウンと考へれば固より分らぬことはない屹と分るけれども唯面倒臭くてソンな事をして居る氣がないから塾の會計とか新聞社の勘定とか何か入組んだ金の事はみんな人任せにして自分は唯その總體の締て何々と云ふ數を見る計り、こんな事で商賣の出來ないのは私も知て居る例へば塾の書生などが學費金を持て來て毎月入用だけ請取りたいから預けて置きたいと云ふ者がある今の貴族院議員の瀧口吉良なども先年書生の時は其中の一人で何百圓か私の處に預けてあつたが私は其金をチャンと箪笥の抽斗に入れて置て毎月取りに來れば十圓でも十五圓でも入用だけ渡して其殘りは又紙に包んで仕舞て置く其金を銀行に預けて如何すれば便利だと云ふことを知るまい事か百も承知で心

に知て居ながら手で爲ることが出來ない銀行に預けるは扨置き其預た紙幣の大小を一寸私に取替へて本の姿を變へることも氣が濟まない如何でも是れは持て生れた藩士の根性か然らざれば書生の机の抽斗の會計法でせうソコで或時例の金融家のエライ人が私方に來て何か金の話になつて千種萬樣實に目に染みるやうな混雜な事を云ふから扨て〳〵如何もウルサイ事だ此金を彼方に向けて彼の金は此方に返へすと云ふ話であるが人に貸す金があれば借りなくても宜さゝうなものだ、商賣人は人の金を借りて商賣すると云ふことは私も能く知て居るが、苟も人に金を貸すと云ふことは餘た金があるから貸すのだ假令ひ商賣人でも貸す金があるなら成る丈けソレを自分に運轉して他人の金をば成る丈け借用しないやうにするのが本意ではないか、然るに自分に資本を持て居ながら態々人に借用とは入らざる事をしたものだ餘計な苦勞を求めるやうなものだと云ふと其人が大に笑て「迂濶千萬途方もない事を云ふ、商賣人と云ふものは入組んで〳〵滅茶々々になつたと云ふ其間に又種々樣々の面白いことのあるもので、そんな馬鹿な事が出來るものか啻に商賣人に限らず凡そ人の金を借用せずに世の中を渡ると云ふことが出來るものか、ソンな人が何處に在るか」と云て私を冷却すから私は其の時始めてヒョイと思付た「今御話を聞けば世の中に借金しない者が何處に在るかと云ふが其人は今こゝに居ます私は是れまで只の一度も人の金を借りたことがない」「そんな馬鹿な事を云ひなさるな」「イヤ如何してもない生れて五十年(是れは十四五年前の話)人の金を一錢でも借りたことはない、ソレが嘘ならば試に私の印形の据て居るものとは云はない、反古でも何でも宜しいソレを搜して持て來て御覽、私が百萬圓で買はうドウしたつてありはしな

い日本國中に福澤の書た借用證文と云ふものはソレこそ有る氣遣ひはないが如何だ」と云ふやうな譯けで其時に私も始めて思ひ出したが私は生れて此方遂ぞ金を借りたことがない是れはマア私の眼から見れば尋常一樣の事と思ふけれども世間の人が見たらば甚だ尋常一樣でないのかも知れぬ

ソレで私は今でも多少の財産を持て居る、持て居るけれども私ところの會計と云ふものは至極簡單で少しも入込んだことはない此金を誰に返へさなければならぬ之を此方に振向けなければならぬと云ふやうな事は絶えてないソレで僅かばかり二百圓とか三百圓とか云ふ金が手元にあつてもなくても構はないソレを銀行に預けて必要のとき小切手で拂ひをすれば利息が德になると云ふソレは私も能く知て居て世間一體さう云ふ風になりたいとは思へども扨自分には小面倒臭

いソンな事にドタバタするよりか金は金で仕舞て置て、拂ふときには其紙幣を計へて渡して遣ると斯う云ふ趣向にして私も家内も其通りな考へで眞實封建武士の机の抽斗の會計と云ふことになつて其話になると丸で別世界のやうで文明流の金融法は私の家に這入りません夫れからして世間の人が私に對して推察する所を私が又推察して見るにドウも世人の思ふ所は決して無理でない、と云ふのは私が若い時から困たと云ふことを一言でも云ふたことがない誠に家事多端で金の入用が多くて困るとか、今歳は斯う云ふ不時な事があつて困却致すとか云ふやうな事を假初にも口外したことがない、私の眼には世間が可笑しく見える世間多數の人が動もすれば貧乏で困る、金が不自由だ無力だ不如意だ、なんかんと愚痴をこぼすのは或は金を貸して貰ひたいと云ふやうな意味で言ふのか但しは洒落に言ふのか、飾りに言ふの

か、私の眼から見れば何の事だか少しも譯けが分らない自分の身に金があらうとなからうと敢て他人に關係したことでない自分一身の利害を下らなく人に語るのは獨言を言ふやうなもので、こんな馬鹿氣た事はない私の流儀にすれば金がなければ使はない、有ても無駄に使はない、多く使ふも少なく使ふも一切世間の人のお世話に相成らぬ、使ひたくなければ使はぬ、使ひたければ使ふ、嘗て人に相談しやうとも思はなければ人に喙を容れさせやうとも思はぬ、貧富苦樂共に獨立獨歩、ドンな事があつても一寸でも困たなんて泣言を云はずに何時も悠々として居るから凡俗世界では其樣子を見てコリヤ何でも金持だと測量する人もありませう所が私は又その測量者があらうと、なからうと、其推測が中らうと、中るまいと、少しも頓着なしに相變らず悠々として居ます、既に先年所得稅法の始めて發布せられた時などは可笑しい區內

の所得稅掛りとか何とか云ふ人が私の家には財產が凡そ七十萬圓ある其割合で稅を取ると內々云て來た者があるから私が其者に云ふに何卒その言葉を忘れて呉れるな、見て居る前で福澤の一家殘らず裸體になつて出て行くから七十萬圓で買て貰ひたい財產は帳面のまゝ渡して家も倉も衣服も諸道具も鍋も釜も皆遣るからソックリ買取て七十萬圓の金に易へたい唯漠然たる評價は迷惑だ現金で賣買したい爾うなれば生來始めての大儲けで生涯さぞ安樂であらうと云て大笑ひしたことがあります

私が經濟上に堅固を守て臆病で大膽な事の出來ないのは先天の性質であるか抑も亦身の境遇に駈られて遂に固く凝り固まつたものでせう本年六十五歲になりますが二十一歲のとき家を去て以來自から一身の謀を爲し二十三歲家兄を喪ひしより後は老母と姪と二人の身の

上を引受け二十八歳にして妻を娶り子を生み一家の責任を自分一身に擔ふて今年に至るまで四十五年の其間、二十三歳の冬大阪緒方先生に身の貧困を訴へて大恩に浴したるのみ其他は假初にも身事家事の私を他人に相談したこともなければ又依賴したこともない、人の智恵を借りやうとも思はず、人の差圖を受けやうとも思はず、人間萬事天運に在りと覺悟して勉めることは飽くまでも根氣能く勉めて種々樣々の方便を運らし、交際を廣くして愛憎の念を絶ち、人に勸め又人の同意を求めるなどは十人並に遣りながらソレでも思ふ事の叶はぬときは尙ほ其以上に進んで哀願はしない、唯元に立戻て獨り靜に思止るのみ詰る所、他人の熱に依らぬと云ふのが私の本願で此一義は私が何時發起したやら自分にも是れと云ふ覺えはないが少年の時からソンな心掛け、イヤ心掛けと云ふよりもソンな癖があつたと思はれます中津に

居て十六七歳のとき白石と云ふ漢學先生の塾に修業中同塾生の醫者か坊主か二人至極の貧生で二人とも按摩をして凌いで居る者がある其時私は如何でもして國を飛出さうと思て居るから之を見て大に心を動かしコリヤ面白い一文なしに國を出て罷り違へば按摩をしても喰ふことは出來ると思てソレから二人の者に按摩の法を習ひ頻りに稽古して隨分上達しました幸に其後按摩の藝が身を助ける程の不仕合もなしに濟みましたが、習ふた藝は忘れぬもので今でも普通の田舍按摩よりかエライ湯治などに行て家內子供を揉んで遣て笑はせる事があります、こんな事がマア私の常に云ふ自力自活の姿とでも云ふ可きものか、是れが故人の傳を書くとか何とか云へば何々氏夙に獨立の大志あり年何歳其學塾に在るや按摩法を學んで云々なんと鹿爪らしく文字を並べるであらうが私などは十六七のとき大志も何もありは

せぬ唯貧乏で其癖、學問修業はしたい、人に話しても世話をして呉れる氣遣ひなし、せうことなしに自分で按摩と思付た事です凡そ人の志は其身の成行次第に由て大きくもなり又小さくもなるもので子供の時に何を言はうと何を行はうと其言行が必ずしも生涯の抵當になるものではない唯先天の遺傳、現在の教育に從て根氣能く勉めて迷はぬ者が勝を占めることでせう

私が商賣に不案内とは申しながら生涯の中で大きな投機のやうなことを試みて首尾能く出來た事がありますソレは幕府時代から著書飜譯を勉めて其製本賣捌の事をば都て書林に任してある所が江戸の書林が必ずしも不正の者ばかりでもないが兎角、人を馬鹿にする風がある、出版物の草稿が出來ると其版下を書くにも版木版摺の職人を雇ふにも亦その製本の紙を買入るゝにも都て書林の引受けで其高いも安

いも云ふがまゝにして大本の著譯者は當合扶持を授けられると云ふのが年來の習慣であるソコで私の出版物を見ると中々大層なもので之を人任せにして不利益は分て居る、書林の奴等に何程の智惠もありはしない高の知れた町人だ、何でも一切の權力を取揚げて此方のものにして遣らうと說を定めた、定めたは宜いが實は望洋の歎で少しも取付端がない第一番の必要と云ふのが職人を集めなければならぬ今までは書林が中に挾まつて居て一切の職人と云ふ者は著譯者の御直參でなく向ふ河岸に居るやうなものだから彼れを此方の直轄にしなければならぬと云ふのが差向きの必要、ソコで私は一策を案じた其次第は當時明治の初年で餘程金もあり之を搔集めて千兩ばかり出來たから夫れから數寄屋町の鹿島と云ふ大きな紙問屋に人を遣て紙の話をして土佐半紙を百何十俵代金千兩餘りの品を卽金で一度に買ふこと

に約束をした其時に千兩の紙と云ふものは實に人の耳目を驚かす、如何なる大書林と雖も百五十兩か二百兩の紙を買ふのがヤットの話でソコへ持て來て千兩現金、直ぐに渡して遣ると云ふのだから直も安くする品物も宜い物を寄越すに極てる、高かつたか安かつたか知らないが百何十俵の半紙を一時に新錢座に引取て土藏一杯積込んでソレから書林に話して版摺の職人を貸して呉れと云ふことにして何十人と云ふ大勢の職人を集め舊同藩の士族二人を監督に置て仕事をさせて居る中に職人が朝夕紙の出入れをするから藏に這入て其紙を見て大に驚き大變なものだ途方もないものだ此家に製本を始めたが、此くらゐ紙があれば仕事は永續するに違ひないと先づ信仰して且つ此方では拂ひをキリ〳〵して遣ると云ふやうな譯けで是れが緒端になつて職人共は問はず語りに色々な事を皆白狀して仕舞ふ、此方の監督者は利いた風をして居るが其實は全くの素人でありながら職人に教はるやうなもので段々巧者になつてソレから版木師も製本仕立師も次第々々に手に附けて是れまで書林の爲す可き事は都て此方の直轄にして書林には唯出版物の賣捌を命じて手數料を取らせる計りのことにしたのは是れは著譯社會の大變革でしたが唯この事ばかりが私の商賣を試みた一例です

品行家風

經濟の事は右の如くにして私は私の流義を守て生涯このまゝ替へずに終ることであらうと思ひますがソレから又自分の一身の行狀は如何であつたか、家を成した後に家の有樣は如何かと云ふことに付て有りのまゝの次第を語りませう扨私の若い時は如何だと申すに中津に

居たとき子供の時分から成年に至るまで何としても同藩の人と打解けて眞實に交はることが出來ない、本當に朋友になつて共々に心事を語る所謂莫逆の友と云ふやうな人は一人もない、世間にないのみならず親類中にもない、と云て私が偏窟者で人と交際が出來ないと云ふではない、ソリヤ男子に接しても婦人に逢ふても快く話をしてドチラかと云へばお饒舌りの方であつたが本當を云ふと表面ばかりで實は此人の眞似をして見たい、彼の人のやうに成りたいとも思はず、人に譽められて嬉しくもなく惡く云はれて怖くもなく都て無頓着で惡く評すれば人を馬鹿にして居たやうなもので假初にも爭ふ氣がない其證據には同年輩の子供と喧嘩をしたことがない喧嘩をしなければ怪我もしない友達と喧嘩をして泣て家に歸て阿母さんに言告けると云ふやうなことは唯の一度もない口先き計り達者で內實は無難無事な子で

した、ソレから國を去て長崎に行き大阪に出て其修業中もワイ〳〵朋友と共に笑ひ共に語て浮々して居るやうにあるけれども身の行狀を慎み品行を正しくすると云ふことは努めずして自然にソレが私の體に備て居ると云ても宜しい、モウそれはさん〳〵な亂暴な話をして大言壯語至らざる所なしと云ふ中にも嫌らしい汚ない話と云ふことは一寸とでも爲たことがない同窓生の話に能くある事で昨夜北の新地に遊んでなんと云ふやうな事を云出さうとすると私は態と其處を去らずに大箕坐をかいてワイ〳〵と其話を打消し「馬鹿野郎、餘計なことを口走るな」と云ふやうな調子で雜ぜ返して仕舞ふ、ソレから江戸に出て來ても相替らず其通り朋友も多い事だから相互に往來するのは不斷の事で頻りに飛廻て居たけれども扨例の吉原とか深川とか云ふ事になると朋友共が私に話をすることが出來ない其癖私は能く事情を

知て居る、誠に事細に知て居る其譯けは小本なんぞ讀むにも及ばず近く朋友共が馬鹿話に浮かれて饒舌るのを默て聞て居れば容易に分る六かしい事も何にもないチャンと呑込んで知て居るけれども如何なこと、左樣な事を思出したこともないのみならず吉原深川は扨置き上野の花見に行たこともない私は安政三年江戸に出て來て只酒が好きだから所謂口腹の奴隷で家にない時は飲みに行かなければならぬ朋友相會すれば飲みに行くと云ふやうな事はソリヤ爲て居るけれども遂ぞ花見遊山はしない文久三年六月緒方先生不幸のとき下谷の自宅出棺駒込の寺に葬式執行の其時上野山内を通行して始めて上野と云ふ處を見た卽ち私が江戸に來てから六年目である成程これが上野か花の咲く處かと通行しながら見物しました、向島も其通りで江戸に來てから毎度人の話には聞くが一度も見たことがない、所で明治三年酷

い膓窒扶斯を煩ひ病後の運動には馬に乘るのが最も宜しいと醫者も勸め朋友も勸めたので其歳の冬から馬に乘て諸方を乘廻り向島と云ふ處も始めて見れば玉川邊にも遊び市中内外行かれる處だけは何處でも乘廻はして東京の方角も大抵分りました其時に向島は景色もよし道もよし毎度馬を試みて向島を廻て上野の方に歸て來るとき何でも土手のやうな處を通りながらアヽ彼處が吉原かと心付てソレでは此まゝ馬に乘て吉原見物を爲やうぢやないかと云出したら連騎の者が場所柄に騎馬では餘り風が惡いと止めてソレ切りになつて未だに私は吉原と云ふ處を見たことがない

斯う云ふやうな次第で一寸と人が考へると私は奇人偏窟者のやうに思はれませうが決して爾うでない私の性質は人に附合ひして愛憎のない積りで貴賤貧富君子も小人も平等一樣藝妓に逢ふても女郎を見

でも塵も埃も之を見て何とも思はぬ、何とも思はぬから困ることもない此奴は穢れた動物だ同席は出來ないなんて妙な澁い顔色して內實ブリ〳〵怒ると云ふやうな事は決してない古いむかしの事であるが四十餘年前長崎に居るとき光永寺と云ふ眞宗寺に同藩の家老が滯留中或日市中の藝妓か女郎か五六人も變な女を集めて酒宴の愉快、私は其時酒を禁じて居るけれども陪席御相伴を仰せ付けられ一座杯盤狼藉の最中家老が私に杯をさして「此酒を飲んで其杯を座中の誰でも宜しい足下の一番好いてる者へさすが宜からう」と云ふのは實は其處に美人が幾人も居る、私は其杯を美人にさしても可笑しい態と避けてさゝなくても可笑しい、屹と困るであらうと嬲るのはチャンと分て居る所が私は少しも困らない、杯をグイと干して「大夫さんの命に從ひ一番好いた人に上げますソレ高さん」と云て杯をさしたのは六七歳ばかりの寺の末子で私が瀉蛙〳〵として笑て居たから家老殿も興にならぬ既に今年春ジャパン、タイムス社の山田季治が長崎へ行くと聞き不圖光永寺の事を思出して、あの寺は如何なつてるか、高さんと云ふ小僧があつた筈だが如何して居るか尋ねて見たいと申したら山田の返事に寺は舊の通り燒けもせず、高さんも無事息災、今は五十一歳の老僧で隱居して居るとて寫眞など寄送しましたが右の一件も私の二十一歳の時だから計へて見ると高さんは七歳でしたらうに、恐ろしい古い話です左樣いふ譯けで私は若い時から婦人に對して假初にも無禮はしない、假令ひ酒に醉ても謹む所は屹と謹み、女の忌がるやうな禁句を口外したことはない、上戸本性で謹みながら女を相手に話もすれば笑ひもして談笑自在、何時も慣れ〳〵しくして其極は世間で云ふ嫌疑と云ふやうな事を何とも思はぬ、血に交はりて赤くならぬこそ男子たる者の

本領であるとチャンと自分に説を極めてあるから男女夜行くときは燈を照らすとか物を受授するに手より手にせずとかアンな古めかしい教訓は私の眼から見ると唯可笑しいばかり扨も〳〵卑怯なる哉ソンな窮窟な事で人間世界が渡れるものか、世間の人が妙な處に用心するのはサゾ忙しいことであらう、自分は古人の教に縛れる氣はないと自から自分の身を信じて颯々と人の家に出入して其處にお嬢さんが居やうと若い内君が獨り留守して居やうと又は杯盤狼藉の席に藝妓とか何とか云ふ者が騷いで居やうと少しも遠慮はしない、酒を飲で大きな聲をしてドン〳〵話をして醉へば面白くなつて戯れて居ると云ふやうな風であるから或は人が見たらば變に思ふこともありませうソコで或時奥平藩の家老が態々私を呼びによこして扨云ふやう、足下は近來某々の家などに毎度出入して例の如く夜分晩くまで酒を飲で

居るとの風聞、某家には娘もあり某家は何時も藝妓など出入して家風が宜しくない足下がそんな處に近づいて醜聲外聞とは殘念だ君子は瓜田に履を結ばず李下に冠を正さずと云ふことがある、年若い大事な身體である、少し注意致したら宜からうと眞面目になつて忠告したから私は其時少しも謝らない「左樣で御在ますかコリヤ面白い私は今まで隨分太平樂を云たとか恐ろしい聲高に話をして居たとか云て毎度人から嫌がられたこともありませうが併し艶男と云はれたのは今日が生れてから始めて、コリヤ私の名譽で至極面白い話だから私は罷めますまい相替らず其家に出入しませう此處で御注意を蒙て夫れで前非を改めて罷めるなんてソンな弱い男ではござらぬ但し御親切は難有い御禮は申上げませうが實は私は何とも思はぬ却て面白いから、モット評判を立てゝ貰ひたい」と云て冷かして歸た事があります

前に申す通り私は江戸に來て六年目に始めて上野と云ふ處を見て十四年目に始めて向島を見たと云ふくらゐの野暮だから勿論芝居などを見物したことはない少年のとき舊藩中津で藩主が城内の能舞臺で田舍の役者共を呼出して芝居を催し藩士ばかりに陪觀させる例があつて其時に一度見物して其後大阪修業中、今の市川團十郎の實父海老藏が道頓堀の興行中或る夜同窓生が今から道頓堀の芝居に行くから一緒に行かう酒もあると云ふから私は酒と聞て應と答へソレから行く道で酒を一升買て德利を携へて二三人連れで芝居に這入り夜分二幕か三幕見たのが生來二度目の見物、ソレから江戸に來て江戸が東京となつても芝居見物の事は思出しもせず又その機會もなくして居る中に今を去ること凡そ十五六年前不圖した事で始めて東京の芝居を見て其時戯れに

誰道名優伎絶倫　先生遊戯事尤新
春風五十獨醒客　却作梨園一醉人

と云ふ詩が出來ました之を見ると私が變人のやうにあるが實は鳴物は甚だ好きで女の子には娘にも孫にも琴三味線を初め又運動半分に踊の稽古もさせて老餘唯一の樂みにして居ます元來私は生れ付き殺風景でもあるまい人間の天性に必ず無藝殺風景と約束があるでもなからうと思ふが何分私の性質と云ふよりも少年の時から樣々の事情がコンな男にして仕舞たのでせう先づ第一に私は幼少の時から敎育の世話をして呉れる者がないのでロクに手習をせずに成長したから今でも書が出來ない成長の後でも自分で手本を習たら宜さゝうなものだが其時は既に洋學の門に入て天下の儒者流を目の敵にして儒者のすることなら一から十まで皆氣に入らぬ就中その行狀が好かない

口に仁義忠孝など饒舌りながらサアと云ふときには夫れ程は意氣地はない殊に不品行で酒を飲で詩を作て書が旨いと云へば評判が宜い都て氣に喰はぬ、よし〳〵洋學流の吾々は反對に出掛けて遣らうと云ふ氣になつて恰も江戸の劍術全盛の時代に刀劍を賣拂て仕舞ひ、乘て嗜きな居合も罷めて知らぬ風をして居たやうな鹽梅式に儒者の奴等が詩を作ると云へば此方は態と作らずに見せやう、奴等が書を善くすると云へば此方は殊更らに等閑にして善く書かずに見せやうと飛だ處に力身込で手習をしなかつたのが生涯の失策、私の家の遺傳を云へば父も兄も文人で殊に兄は書も善くし畫も出來、篆刻も出來る程の多藝な人に其弟は此通りな無藝無能、書畫は扨置き骨董も美術品も一切無頓着、住居の家も大工任せ、庭園の木石も植木屋次第、衣服の流行など何が何やら少しも知らず又知らうとも思はず唯人の着せて呉れるも

のを着て居る、或時家内の留守に急用が出來て外出のとき着物を着替へやうと思ひ箪笥の引出しを明けて一番上にある着物を着て出て、歸宅の上家内の者が私の着て居るのを見てソレは下着だと云て大に笑はれたことがある殺風景も些と念入の殺風景で決して譽めた話でない畢竟少年の時から種々様々の事情に逐はれてコンな事に成行き生涯これで終るのでせう兎角世間の人の悦んで居るやうな事は私には樂みにならぬ誠に損な性分です、ダカラ近來は芝居を見物したり又は宅に藝人など呼ぶこともあるが是れとて無上の快樂事とも思はれずマア〳〵兒孫を集めて共に戯れ色々な藝をさせたり嗜きな物を馳走したりして一家内の長少睦しく互に打解けて談り笑ふ其談笑の聲を一種の音樂として老餘の樂みにして居ます

ソレから私方の家事家風を語りませう文久元年舊同藩士の媒妁を以

て同藩士族江戸定府士岐太郎八の次女を娶り是れが今の老妻です結婚の時私は二十八歳、妻は十七歳、藩制の身分を申せば妻の方は上流士族、私は小士族、少し不釣合のやうにあるが血統は兩人共頗る宜しく往古はイザ知らず凡そ五世以降双方の家に遺傳病質もなければ忌む可き病に罹りたる先人もなし妻は無論、私の身に惡疾のある可きやうもなく夫妻無病、文久三年に生れたのが一太郎その次は捨次郎と次第に誕生して四男五女合して九人の子供になり幸にして九人とも生れたまゝ皆無事で一人も缺けない、九人の内五人までは母の乳で養ひ以下四人は多産の母の身體衛生の爲めに乳母を雇ふて育てました、養育法は、着物よりも食物の方に心を用ひ、粗服はさせても滋養物は屹と與へるやうにして九人とも幼少の時から體養に不足はない又その躾方は溫和と活潑とを旨とし大抵の處までは子供の自由に任せる例へば風

呂の湯を熱くして無理に入れるやうな事はせず据風呂の側に大きな水桶を置て子供の勝手次第に、ぬるくも熱くもさせる、全く自由自在のやうなれども左ればとて食物を勝手に任せて何品でも喰ひ次第にすると云ふ譯けではない又子供の身體の活潑を祈れば室内の裝飾などは迚も手に及ばぬ事と覺悟して障子唐紙を破り諸道具に疵付けても先づ見逃がしにして大抵な亂暴には大きな聲をして叱ることはない酷く剛情を張るやうな事があれば父母の顏色を六かしくして睨む位が頂上で如何なる場合にも手を下して打たことは一度もない又親が實子に向ても嫁に接しても又兄姉が弟妹に對しても名を呼棄にせず家の中に嚴父慈母の區別なく嚴と云へば父母共に嚴なり慈と云へば父母共に慈なり一家の中は丸で朋友のやうで今でも小さい孫などは阿母さんはどうかすると怖いけれども、お祖父さんが一番怖くないと云

て居る世間並にすると少し甘いやうに見えるがソレでも私方の孫子に限て別段に我儘でもなし長少戯れながら長者の眞面目に言ふ事は能く聞て逆ふ者もないから餘り嚴重にせぬ方が利益かと思はれる又家の中に祕密事なしと云ふのが私方の家風で夫婦親子の間に隱す事はないドンな事でも云はれないことはない、子供が段々成長して是れは彼の子に話して此の子には內證なんてソンな事は絕えてない、親が子供の不行屆を咎めて遣れば子供も亦親の失策を笑ふと云ふやうな次第で古風な目を以て見ると一寸と尊卑の禮儀がないやうに見えませう其禮儀の事に就て申せば家の主人が出入するとき家內の者が玄關まで送迎して御辭儀をすると云ふやうな事が能く世間にあるが私の處では絕えてソンな事がない私の外出するには玄關からも出ればだいどころ臺所からも出る、歸るときも其通りで唯足の向た方に這入て來る或は

車に乘て歸て來た時に車夫又別當共へ玄關の處で御歸りなんて餘計な事を云て吳れるなと云ふ譯けであるから幾ら玄關で怒鳴ても出て來る人はない其一點になると世間の人ぢやない、近くは內の御祖母さんが怪んで居ませう此老人は土岐家の後室本年七十七歲むかしは奧平藩士の奧樣で武家の禮儀作法を大事に勤めた身であるから今日の福澤の家風を見て何分不作法で善くない左ればとて是れが惡いと云ふ箇條もない、妙な事だと思て居るだらうと私は竊に推察しますソレから又私に九人の子供があるが其九人の中に輕重愛憎と云ふことは眞實一寸ともない又四男五女の其男の子と女の子と違ひのあられやう譯けもない世間では男子が生れると大造目出度がり女の子でも無病なれば先づ〳〵目出度いなんて自から輕重があるやうだがコンな馬鹿氣た事はない娘の子なれば何が惡いか、私は九人の子がみんな娘

だつて少しも殘念と思はぬ唯今日では男の子が四人、女の子が五人宜い鹽梅に振分けになつてると思ふばかり男女長少、腹の底から之を愛して兎の毛ほども分隔てはない道德學者は動もすると世界中の人を相手にして一視同仁なんて大きな事を云てるではないか、況して自分の生んだ子供の取扱ひに一視同仁が出來ぬと云ふやうな淺ましい事があられるものか唯私の考に總領も其他の子供も同じとは云ひながら私が死ねば總領が相續する相續すれば自から中心になるから財產を分配するにも外の子に比較して一段手厚くして又何か物があつて兄弟中誰にも遣りやうがない唯一つしかないと云ふやうな物は總領の一太郎が取て宜からうと云ふくらゐな事で其外には何も變ることはない例へば斯う云ふ事がある明治十四五年の頃、月日は忘れたが私が日本橋の知る人の家に行て見ると其座敷に金屏風だの蒔繪だの花

活だのゴテ〳〵一杯に列べてあるコリヤ何だと聞て見れば亞米利加に輸出する品だと云ふ夫れから私が不圖した出來心で此品を一目見渡して私の欲しいものは一品でもない皆不用品だが又入用と云へば一品も殘さず皆入用だ兎に角に之を亞米利加に積出して幾らの金になれば宜いのかソレは知らぬけれども賣ると云へば皆買ふが如何だ買たからと云てソレを又儲けて賣らうと云ふのではない家に仕舞込んで置くのだと云ふと其主人も唯の素町人でない成程爾うだなコリヤ名古屋から來た物であるが亞米利加に遣て仕舞へば是れ丈けの品がなくなるお前さんの處に遣れば失くならずにあるから賣りませうソンなら皆買ふと云て二千二三百圓かで何百品あるか碌に品も見ないで皆買て仕舞たが夫れから私が其品を見て樂むではなし品柄も能く知らず數も覺えず唯邪魔になるばかりだから五六年前の事でした

九人の子供に分けて取て仕舞へと申して子供がワイ〳〵寄て其品を九に分けてソレを籤で取て今では皆子供が銘々に引受けて家を持て居る者は家に持て行く者もありマダ私のところの土藏の中に入れてあるのもある、と云ふのが凡そ私の財産分配法で如何にも其子に厚薄と云ふものは一寸ともないのですから子供の中に不平があらうたッて有られた譯けのものでないと思て居ます

近來遺言も書きました遺言の事に就ては能く西洋の話にある主人の死んだ後で遺言書を明けて見てワッと驚いたなんて云ふ事は毎度聞てるが私は甚だ感服しない死後に見せることを生前に言ふことが出來ないとは可笑しい畢竟西洋人が習慣に迷ふて馬鹿をして居るのだ乃公はソンな馬鹿の眞似はしないぞと云て家内子供に遺言の書付を見せて此遺言書は箪笥の此抽斗に這入て居るから皆能く見て置け又說が變れば又書替へて又見せるから能く見て置て乃公の死んだ後で爭ふやうな卑劣な事をするなよと申して笑て居ます

扨又子供の教育法に就ては私は專ら身體の方を大事にして幼少の時から强ひて讀書などさせない先づ獸身を成して後に人心を養ふと云ふのが私の主義であるから生れて三歲五歲まではいろはの字も見せず七八歲にもなれば手習をさせたりさせなかつたりマダ讀書はさせない夫れまでは唯暴れ次第に暴れさせて唯衣食には能く氣を付けて遣り又子供ながらも卑劣な事をしたり賤しい言葉を眞似たりすれば之を咎るのみ其外は一切投遣りにして自由自在にして置く其有樣は犬猫の子を育てると變はることはない卽ち是れが先づ獸身を成す法にして幸に犬猫のやうに成長して無事無病八九歲か十歲にもなればソコで始めて教育の門に入れて本當に毎日時を定めて修業をさせ

る、尚ほ其時にも身體の事は決して等閑にしない、世間の父母は動もすると勉強々々と云て子供が靜にして讀書すれば之を賞める者が多いが私方の子供は讀書勉強して遂ぞ賞められたことはないのみか私は反對に之を止めて居る子供は既に通り過ぎて今は幼少な孫の世話をして居るが矢張り同樣で年齡不似合に遠足したとか柔術體操がエラクなつたとか云へば褒美でも與へて賞めて遣るけれども本を能く讀むと云て賞めたことはない既に二十年前の事です長男一太郎と次男捨次郎と兩人を帝國大學の豫備門に入れて修學させて居た處が兎角胃が惡くなるソレから宅に呼返して色々手當すると次第に宜くなる宜くなるから又入れると又惡くなる到頭三度入れて三度失敗した其時には田中不二麿と云ふ人が文部の長官をして居たから田中にも毎度話をしました「私方の子供を豫備門に入れて實際の實驗があるが文

部學校の教授法を此まゝにして遣て行けば生徒を殺すに極て居る殺さなければ氣狂ひになるか然らざれば身心共に衰弱して半死半生の片輪者になつて仕舞ふに違ひない丁度此豫備門の修業が三四年かゝる其間に大學の法が改まるだらうと思てソレを便りに子供を豫備門に入れて置くが早く改正して貰ひたい此儘で置くならば東京大學は少年の健康屠殺場と命名して宜しい早々教授法を改めて貰ひたい」と懇意の間柄で遠慮なく話はしたが何分埒が明かず子供は相替らず三ケ月遣て置けば三ケ月引かして置かなければならぬと云ふやうな譯けで何としても豫備門の修業に堪へず私も遂に斷念して仕舞ふて夫れから此方の塾(慶應義塾なり)に入れて普通の學科を卒業させて亞米利加に遣て彼の大學校の世話になりました私は日本大學の教科を惡いと云ふのではないけれども教育の仕樣が餘り嚴重で荷物が重過ぎ

るのを恐れて文部大學を避けたのです其通りで今でも說は變へない何としても身體が大事だと思ひます

又私の考に人間は成長して後に自分の幼年の時の有樣を知りたいもので他人はイザ知らず私が自分で左樣思ふから筆まめな事だが私は小供の生立の模樣を書て置きました此子は何年何月何日何分に產れ產の難易は云々幼少の時の健康は斯く〳〵、氣質の强弱、生付の癖などザッと荒增し記してあれば幼少の時の寫眞を見ると同樣、この書たものを見れば成長の後第一面白いに違ひない、自から又心得になる事もありませう私などは不幸にして實父の顏も知らず畫像に寫したものもなし又私がドンナ子供であつたか母に聞たばかりで書たものはない少年の時から長老の人がソンな話をすると耳を傾けて聞て唯殘念にばかり思ふて獨り身の不幸を悲んで居たから今度は私の番になつ

て此通りに自分の傳を記して子供の爲めにし又先年子供の生立の事をも認めて置たから先づ遺憾はない積りです又親子の間は愛情一偏で何ほど年を取ても互に理窟らしい議論は無用の沙汰である是れは私も妻も全く同說で親子の間を成る丈け離れぬやうにする計り例へば先年長男次男が六年の間亞米利加に行て居ました其時には亞米利加の郵船が一週間に大抵一度、時としては二週間に一度と云ふ位の往復でしたが子供兩人の在米中私は何か要用の時は勿論、假令ひ用事がなくても每便必ず手紙を遣らない事はない、六年の間何でも三百何十通と云ふ手紙を書きましたが私が手紙を書放にして家內が校合方になつて封じて遣るから兩親の親筆に相違ない彼方の子供兩人も飛脚船の來る度に必ず手紙を寄越す此事は兩人出發の節堅く申付て「留學中手紙は每便必ず〳〵出せ、用がなければ用がないと云て寄越せ又學

問を勉強して半死半生の色の青い大學者になつて歸て來るより筋骨逞しき無學文盲なものになつて歸て來い其方が餘程悦しい假初にも無法な事をして勉強し過ぎるな、儉約は何處までも儉約しろ、けれども健康に係はると云ふほどの病氣か何かの事に付き金次第で如何にもなると云ふことならば思ひ切て金を使へ少しも構はぬから」と斯う云ふのが私の命令でソンな事で六年の間學んで二人とも無事に歸て來ました

又私の内が夫婦親子睦じくて私の行狀が正しいからと云て特に譽める程の事でもない世の中に品行方正の君子は幾らもある私も亦これが人間唯一の目的で一身の品行修まりて能事終るなんて自慢をするやうな馬鹿でもないと自から信じて居るが扨又これが妙なもので社會の交際に關係する所は甚だ廣くて意外の邊に力を及ぼすことがあ

る其一例を申せば舊藩の奥平家に對して私は如何なる者ぞと尋ぬるに見る影もなき貧小士族が洋學など修業して異樣な說を唱へ或は外國に行き又或は外國の書を飜譯して大言を吐散らし剩さへ儒流を輕蔑して憚る所を知らずと云へば是れは所謂異端外道に違ひない同藩一般の見る所で此通りなれば藩主の奥なんぞにはドンな報告が這入て居るか知れない兎に角に福澤諭吉は大變な奴だと折紙が付て居たに違ひない所が物換り星移り段々時勢が變遷して王政維新の世の中になつて見れば藩論も自から面目を改め世間一般西洋流の喧ましい今日福澤もマンザラでなし或は之を近づけて何かの役に立つこともあらうと云ふやうな說がチラホラと涌て來た其時に島津祐太郎と云ふ奥平家の元老は頗る事の能く分る、云はゞ卓識の君子で時勢の緩急を視察してコリヤ福澤を疎外するは不利であると云ふことに着眼し

て居る折柄、奥平家の大奥に芳蓮院様と云ふ女隠居がある此貴婦人は一橋家から奥平家に下て來た由緒ある身分で最早や餘程の老年でもあり一家無上の御方様と崇められて居るソコで島津が先づ其御隠居様に對して色々西洋の話をする中に彼の國には文學武備、富國强兵、醫術も精しく航海術も巧なり其中には隨分日本の風俗習慣に違た事も數々ありますが爰に西洋流義に不思議なるは男女の間柄で男女相互に輕重なく如何なる身分の人でも一夫一婦に限て居ます是れ丈けは西洋の特色で御座ると云ふ所を持込だ所が其御隠居様も若い時には直接に身に覺えがある此話を聞て心を動かさずには居られない、恰も豁然發明した様子でソレから福澤を近づける氣になつて次第々々に奥向の方に出入の道が開けて御隠居様を始め所謂御上通りの人に逢ふて見れば福澤の外道も唯の人間で角も生えて居なければ尻尾のあ

る者でもない至極穏かな人間だと云ふ所からして役々懇親になつたと云ふ其話は程經て後に内々島津から聞きましたシテ見ると一夫一婦の說も隱然の中には隨分勢力のあるもので就ては今の世に多妻の惡弊を除て文明風にするなんと論ずるは野暮だと云ふやうな說があるけれども畢竟負惜みの苦しい遁げ口上で取るに足らない、一夫一婦の正論決して野暮でない世間の多數は同主義で殊に上流の婦人は悉く此方の味方であるから、私の身がこの先き何時まで生きて居るか知れぬけれども有らん限りの力を盡して前後左右を顧みずドンな奴を敵にしても構はぬ多妻法を取締めて少しでも此人間社會の表面だけでも見られるやうな風にして遣らうと思て居ます

老餘の半生

私の生涯は終始替ることなく、少年時代の辛苦、老後の安樂、何も珍らしいことはない、今の世界に人間普通の苦樂を嘗めて今日に至るまで大に愧ることもなく大に後悔することもなく心靜に月日を送りしは先づ以て身の仕合せと云はねばならぬ、所で世間は廣し私の苦樂を遠方から見て色々に評論し色々に疑ふ者もありませう就中私がマンザラの馬鹿でもなく政治の事も隨分知て居ながら遂に政府の役人にならぬと云ふは可笑しい、日本社會の十人は十人、百人は百人皆立身出世を求めて役人にこそなりたがる其處に福澤が一人これをいやがるのは不審だと蔭で竊に評論する許りでない現に直接に私に向て質問する者もある啻に日本人ばかりでない知己の外國人も私の進退を疑ひ何故政府に出て仕事をせぬか政府の好地位に立て思ふ事を行へば名譽にも爲り金にも爲り面白いではないかと米國人などは毎度勸めに來たことがあるけれども私は唯笑て取合はぬソコで維新の當分は政府の連中が私を評して佐幕家の一人と認め彼れは舊幕府に操を立てゝ新政府に仕官せぬ者である、將軍政治を悅んで王政を嫌ふ者である古來革命の歷史に前朝の遺臣と云ふ者があるが福澤も其遺臣を氣取て物外に飄然として居ながら心中無限の不平を抱いて居るに違ひない心に不平があれば新政府の爲めに宜いことは考へない油斷のならぬ奴だなんて種々樣々な想像を運らして居る者の多いのは私も大抵知て居る、所が斯く評せらるゝ前朝の遺臣殿は久しい以前から前朝の門閥制度鎖國主義に愛想をつかして維新の際に幕府の忠臣義士が盛んに忠義論を論じて佐幕の氣焰を吐て脫走までする時に私は强て議論もせず脫走連中に知て居る者があれば餘計な事をするな負けるから罷にしろと云て止めて居た位だから福澤を評するに前朝の遺臣論も

勘定が合はぬ前朝の遺臣と云へば維新の時に幕府の忠臣義士こそ丁度適當の役なれども此忠臣義士は前朝に忠義の一役を勤めて何時の間にか早替り、第二の忠義役を勤めて第二の忠臣義士となつて居るから是れも遺臣と云はれぬ其遺臣論は姑く擱き私の身の進退は前に申す通り維新の際に幕府の門閥制度鎖國主義が腹の底から嫌だから佐幕の氣がない左ればとて勤王家の擧動を見れば幕府に較べてお釣りの出る程の鎖國攘夷固よりコンな連中に加勢しやうと思ひも寄らず唯ジッと中立獨立と說を極めて居ると今度の新政府は開國に豹變した樣子で立派な命令は出たけれども開國の名義中、鎖攘タップリ何が何やら少しも信ずるに足らず東西南北何れを見ても共に語る可き人は一人もなし唯獨りで身に叶ふ丈けの事を勤めて開國一偏西洋文明の一天張りでリキンで居る內に政府の開國論が次第々々に眞成の

ものになつて來て一切萬事改進ならざるはなし所謂文明駸々乎として進歩するの世の中になつたこそ實に有り難い仕合せで實に不思議な事で云はゞ私の大願も成就したやうなものだから最早や一點の不平は云はれないソコで私の身の進退に就ても更らに問題が起る、是れまで新政府に出身しなかつたのは政府が鎖國攘夷の主義であるから之を嫌ふたのだ假令ひ開國と觸出しても其內實は鎖攘の根性、信ずるに足らずと見縊たのである然るに政府の方針がいよ〳〵開國文明と決して着々事實に顯はるゝに於ては官界に力を盡して政府人と共に文明の國事を經營するこそ本意ではないかと世間の人の思ふのは一寸と尤ものやうに見えるが此一段になつてもマダ私に動く氣がない從前曾て人に語らず又語る必要もないから默て居て內の妻子も本當に知りますまいが私の本心に於て何としても仕官が出來られない其

眞面目を丸出しに申せば第一政府が其方針を開國文明と決定して大に國事を改革すると同時に役人達が國民に對して無暗に威張る其威張るのも行政上の威嚴と云へば自から理由もあるが實際は爾うでない唯殼威張をして喜んで居る例へば位記などは王政維新文明の政治と共に罷めさうなことを罷めずに人間の身に妙な金箔を着けるやうな事をして日本國中いらざる處に上下貴賤の區別を立てゝ役人と人民と人種の違ふやうな細工をして居る、既に政府が貴いと云へば政府に入る人も自然に貴くなる、貴くなれば自然に威張るやうになる、其威張りは卽ち殼威張で誠に宜しくないと知りながら何も蚊も自然の勢で役人の仲間になれば何時の間にか共に殼威張を遣るやうに成り行く然かのみならず自分より下に向て威張れば上に向ては威張られる齟こつこ鼠こつこ實に馬鹿らしくて面白くない、政府に這入りさへせ

ねば馬鹿者の威張るのを唯見物して唯笑て居る計りなれども今の日本の風潮で役人の仲間になれば假令ひ其上の好地位に居ても兎に角に殼威張と名づくる醜體を犯さねばならぬ是れが私の性質に於て出來ない、之を第一として第二には甚だ申し憎いことだが役人全體の風儀を見るに氣品が高くない其平生美衣美食大きな邸宅に住居して散財の法も奇麗で萬事萬端思切りが能くて世に處し政を料理するにも卑劣でない至極面白い氣風であるが何分にも支那流の磊落を氣取て一身の私を慎しむことに氣が付かぬ動もすれば酒を飲んで婦人に戯れ肉慾を以て無上の快樂事として居るやうに見える家の內外に妾などを飼ふて多妻の罪を犯しながら耻かしいとも思はず其惡事を隱さうともせずに横風な顏をして居るのは一方に西洋文明の新事業を行ひ他の一方には和漢の舊醜體を學ぶものと云はねばならぬダカラ

外の事を差置て此一點に就て見れば何だか一段下た下等人種のやうに見える、是れも世の中の流俗として遠方から眺めて居れば左まで憎らしくもなく又咎めやうとも思はぬ、時に往來して用事も語り談笑妨げなけれども扨いよ〳〵此人種の仲間になつて一つ竈の飯を喰ひ本當に親しく近くならうと云ふには何處となく穢ないやうに汚れたやうに思はれてッヒ嫌になる是れは私の潔癖とでも云ふやうなもので全體を申せば度量の狹いのでせうが何分にも生れつきの性質とあれば仕方がない

第三幕末に勤王佐幕の二派が東西に立分れて居る其時に私は唯古來の門閥制度が嫌ひ、鎖國攘夷が嫌ひばかりで固より幕府に感服せぬのみかコンな政府は潰して仕舞ふが宜いと不斷氣焔を吐て居たが左れば勤王連の樣を見れば鎖攘論は幕府に較べて一段も二段も劇し

いから固よりコンな連中に心を寄せる筈はない唯默て傍觀して居る中に維新の騷動になつて德川將軍は逃げて歸て來たスルと幕府の人は勿論諸方の佐幕連が中々喧しくなつて議論百出東照神君三百年の遺業は一朝にして棄つ可らず三百年の君恩は臣子の身として忘る可らず薩長何者ぞ唯是れ關ヶ原の降參武士のみ堂々たる三河譜代の八萬騎何の面目あれば彼の降參武士に膝を屈すべきやなんて大造な劍幕で薩長の賊軍を東海道に邀へ擊んとする者もあれば軍艦を以て脫走する者もあり策士論客は將軍に謁して一戰の奮發を促がし諫學の極聲を放て號泣するなんぞは如何にもエライ有樣で忠臣義士の共進會であつたが其忠義論もトウ〳〵行はれずに幕府がいよ〳〵解散になると忠臣義士は軍艦に乘て箱館に居る者もあれば陸兵を指揮して東北地方に戰ふ者もあり又はプリ〳〵立腹して靜岡の方に行く者

もある其中で忠義心の堅い者は東京を賊地と云て東京で出來た物は菓子も喰はぬ夜分寢る時にも東京の方は頭にせぬ、東京の話をすれば口が汚れる話を聞けば耳が汚れると云ふ鹽梅式は丸で今世の伯夷叔齊、靜岡は恰も明治初年の首陽山であつたのは凄まじい、所が一年立ち二年立つ中に其伯夷叔齊殿が首陽山に蕨の乏しいのを感じたか、ソロ〳〵山の麓に下りて賊地の方にノッソリ首を出すのみか身體を丸出にして新政府に出身、海陸の脫走人も靜岡行の伯夷叔齊も猫も杓子も政府の邊に群れ集て以前の賊徒今の官員衆に謁見、是れは初めて御目に謁るとも云はれまい、兼て御存じの日本臣民で御座ると云ふやうな調子で君子は既往を語らず前言前行は唯戲れのみと双方打解けて波風なく治まりの付たのは誠に目出度い何も咎立てするにも及ばぬやうだが私には少し說がある抑も王政維新の爭が政治主義の異同から

起て例へば勤王家は鎖國攘夷を主張し佐幕家は開國改進を唱へて遂に幕府の敗北と爲り其後に至て勤王家も大に悟りて開國主義に變じ恰も佐幕家の宿論に投ずるが故に之と共に爾後の方針を與にすると云へば至極尤もに聞ゆれども當時の爭に開鎖など云ふ主義の沙汰は少しもない佐幕家の進退は一切萬事君臣の名分から割出して德川三百年の天下云々と爭ひながら其天下が無くなつたら爭の點も無くなつて平氣の平左衞門とは可笑しいソレも理屈の分らぬ小輩ならば固より宜しいが爭論の發起人で頻りに忠義論を唱へて伯夷叔齊を氣取り又は其身躬から脫走して世の中を騷がした人達の氣が知れない、勝負は時の運に由る、負けても耻かしいことはない、議論が中らなかつても構はないが遺傷なつたら其身の不運と諦らめて山に引込むか、寺の坊主にでもなつて生涯を送れば宜いと思へども中々以て坊主どころ

か酒蛙々々と高い役人になつて嬉しがつて居るのが私の氣に喰はぬ扨々忠臣義士も當てにならぬ、君臣主從の名分論も浮氣なものだコンな薄ぺらな人間と伍を爲すよりも獨りで居る方が心持が宜いと說を極めて初一念を守り政治の事は一切人に任せて自分は自分だけの事を勉めるやうに身構へをしました實は私の身の上に何も緣のないことで入らざるお世話のやうだが前後の事情を能く知て居るから忠臣義士の成行を見るとツヒ氣の毒になつて意氣地なしのやうに腰拔のやうに思ふまいと思ても思はれて堪らない全く私の癇癪でせうが是れも自然に私の功名心を淡泊にさせた原因であらうと思はれます第四には勤王佐幕など云ふ喧しい議論は差置き維新政府の基礎が定まると日本國中の士族は無論百姓の子も町人の弟も少しばかり文字でも分る奴は皆役人になりたいと云ふ假令ひ役人にならぬでも兎に角に政府に近づいて何か金儲でもしやうと云ふ熱心で其有樣は臭い物に蠅のたかるやうだ全國の人民政府に依らねば身を立てる處のないやうに思ふて一身獨立と云ふ考は少しもない偶ま外國修業の書生なとが歸て來て僕は畢生獨立の覺悟で政府任官は思ひも寄らぬ、なんかんと鹿爪らしく私方へ來て滿腹の氣焰を吐く者は幾らもある私は最初から當てにせずに宜い加減に聲流して居ると其獨立先生が久しく見えぬ、スルと後に聞けば其男はチャンと何省の書記官に爲り運の好い奴は地方官になつて居ると云ふやうな風で何も之を咎めるではない人々の進退は其人の自由自在なれども全國の人が唯政府の一方を目的にして外に立身の道なしと思込んで居るのは畢竟漢學敎育の餘弊で所謂宿昔青雲の志と云ふことが先祖以來の遺傳に存して居る一種の迷である今この迷を醒まして文明獨立の本義を知らせやうとす

るには天下一人でも其眞實の手本を見せたい、亦自から其方針に向ふ者もあるだらう一國の獨立は國民の獨立心から湧て出てることだ、國中を擧げて古風の奴隷根性では迚も國が持てない、出來ることか出來ないことかソンな事に躊躇せず自分が其手本になつて見やうと思付き人間萬事無頓着と覺悟を定めて唯獨立獨歩と安心決定したから政府に依りすがる氣もない役人達に賴む氣もない貧乏すれば金を使はない、金が出來れば自分の勝手に使ふ、人に交はるには出來る丈けの誠を盡して交はるソレでも厭と云へば交はつて呉れなくても宜しい、客を招待すれば此方の家風の通りに心を用ひて饗應する其風が嫌ひなら來て呉れなくても苦しうない此方の身に叶ふ丈けを盡してソレから上は先方の領分だ譽めるなり譏るなり喜ぶなり怒るなり勝手次第にしろ譽められて左まで歡びもせず譏られて左まで腹も立てずいよ

〳〵氣が合はねば遠くに離れて附合はぬ計りだ一切萬事、人にも物にもぶら下らずに云はゞ捨身になつて世の中を渡るとチャンと說を定めて居るから何としても政府へ仕官などは出來ない此流儀が果して世の中の手本になつて宜い事か、惡い事か、ソレも無頓着だ宜ければ甚だ宜しい、惡るければソレまでの事だ其先きまで責任を脊負ひ込まうとは思ひません

右の通り條目を並べて第一から第四まで述立てゝ見れば私の政府に出ないのは初めからチャンと理屈を定めて箇樣々々と自から自分を束縛してあるやうに見えるが實はソレホド窮窟な譯けではないソレホド六かしい事でもない唯今日これを筆記して人に分るやうにしやうとするには話に順序がなくては叶はぬソコで久しい前年から今日に至るまで物に觸れ事に當り人と談論した事などを思出して彼の時

はアヽであつた此時は斯うであつたと記憶中に往來するものを取集めて見ると前に記した通りになる詰る所、私は政治の事を輕く見て熱心でないのが政界に近づかぬ原因でせう喩へば人の性質は下戸上戸があつて下戸は酒屋に入らず上戸は餅屋に近づかぬと云ふ位のもので政府が酒屋なら私は政事の下戸でせう、とは云ふものゝ私が政治の事を全く知らぬではない口に談論もすれば紙に書きもする但し談論書記する計りで自から其事に當らうと思はぬ其趣は恰も診察醫が病を診斷して其病を療治しやうとも思はず又事實に於て療治する腕もないやうなものでせうが病床の療治は皆無素人でも時としては診察醫も役に立つことがある、ダカラ世間の人も私の政治診斷書を見て是れは本當の開業醫で療治が出來るだらう病家を求めるだらうと推察するのは大間違の沙汰です此事に就て一寸と語りますが明治十四年

の頃日本の政治社會に大騒動が起て私の身にも大笑ひな珍事が出來ました明治十三年の冬、時の執政大隈伊藤井上の三人から私方に何か申して參て或る處に面會して見ると何か公報のやうな官報のやうな新聞紙を起すから私に擔任して呉れろと云ふ一向趣意が分らぬから先づ御免と申して去ると其後度々人の往復を重ねて話が濃くなりと〻〻仕舞に政府はいよ〻〻國會を開く積りで其用意の爲めに新聞紙も起す事であると秘密を明かしたから是れは近頃面白い話だソンな事なら考へ直して新聞紙も引受けやうと凡そ約束は出來たがマダ何時からと云ふ期日は定まらずに其まゝに年も明けて明治十四年と爲り十四年も春去秋來頓と埒の明かぬ樣子なれども此方も左まで急ぐ事でないから打遣て置く中に何か政府中に議論が生じたと見え以前至極同主義でありし隈伊井の三人が漸く不和になつて其果ては大

隈が辭職することになりまして扨大隈の辭職は左まで驚くに足らず大臣の進退は毎度珍らしくもない事であるが此辭職の一條が福澤にまで影響して來たのが大笑ひだ當時の政府の騷ぎは中々一通りでない政府が動けば政界の小輩も皆動搖して隨て又種々樣々の風聞を製造する者も多い其風聞の一二を申せば全體大隈と云ふは專横な男で樣々に事を企てる其後には福澤が居て謀主になつてる其上に三菱の岩崎彌太郎が金主になつて既に三十萬圓の大金を出したさうだなんて馬鹿な茶番狂言の筋書見たやうな事を觸廻はしてソレから大隈の辭職と共に政府の大方針が定まり國會開設は明治二十三年と豫約して色々の改革を施す中にも從前の教育法を改めて所謂儒教主義を復活せしめ文部省も一時妙な風になつて來て其風が全國の隅々までも靡かして十何年後の今日に至るまで政府の人も其始末に當惑して居るでせう凡そ當時の政變は政府人の發狂とでも云ふやうな有樣で私は其後岩倉から度々呼びに來てソット裏の茶室のやうな處で面會主人公は何かエライ心配な樣子で此度の一件は政府中實に容易ならぬ動搖である西南戰爭の時にも隨分苦勞したが今度の始末はソレよりも六かしいなんかんと話すのを聞けば餘程騷いだものと察しられる實に馬鹿氣たとで政府は明治二十三年國會開設と國民に約束して十年後には饗應すると云て案内狀を出したやうなものだ所が其十年の間に客人の氣に入らぬ事ばかり仕向けて人を捕へて牢に入れたり東京の外に逐出したりマダ夫でも足らずに役人達はむかしの大名公卿の眞似をして一華族になつて是れ見よがしに殼威張を遣て居るから天下の人はます〳〵腹を立てゝ暴れ廻はる、何の事はない饗應の主人と客とマダ顏も合はせぬ先きに角突合ひになつて居るから可笑しい、十

四年の眞面目の事實は私が詳に記して家に藏めてあるけれども今更ら人の厭がる事を公けにするでもなし默て居ますが其とき私は寺島と極懇意だから何も蚊も話して聞かせて「ドウダイ僕が今口まめに饒舌て廻ると政府の中に隨分困る奴が出來るが」と云ふと寺島も始めて聞て驚き「成程さうだ政治上の魂膽は隨分穢いものとは云ひながら是れはアンマリ酷い少し捩くつて遣ても宜いぢやないか」と態と勸めるやうな風であつたけれども私は夫れ程に思はぬ「御同前に年はモウ四十以上ではないか先づ〳〵無益な殺生は罷にしやう」と云て笑て分れたことがあるコンな譯で私は十四年の政變の其時から何も實際に關係はない俗界に云ふ政治上の野心など思も寄らぬ事だから誠に平氣で唯他人のドタバタするのを見物して居るけれども政府の目を以て此見物人を見れば又不思議なもので色々な姿に寫ると見える明治

何年か保安條例の出たとき私も此條例の科人になつて東京を逐出されると云ふ風聞、ソレは其時塾に居た小野友次郎が警視廳に懇意の人があつて極内々其事を聞出して私と同時に後藤象次郎も共に放逐と確に云ふから、ナニ殺されるではなしイザと云へば川崎邊まで出て行けば宜い」と申して居る中、その翌日か翌々日か小野が又來て前の事は取消しになつたと云ふので事は濟みました又その後明治二十年頃かと思ふ井上角五郎が朝鮮で何とやらしたと云ふので捕へられて其時の騒動と云ふものは大變で警察の役人が來て私方の家搜しサ、夫から井上が何か吟味に逢ふて福澤諭吉に證人になつて出て來いと云て私を態々裁判所に呼出してタワイもない事を散々尋てドウ、かしたら福澤も科人の仲間にしたいと云ふやうな風が見えました都てコンな事は唯大間違で私の身には何ともない却て世の中の人心の動く其運動

の方向緩急を視察して面白く思て居るが又一歩を進めて虚心平氣に考ふれば私が兎角政界の人に疑はれると云ふのも全く無理はない第一私は何としても役人になる氣がない是れは世間に例の少ない事で仕官流行熱中奔走の世の中に獨りこれが嫌ひと云へば一寸と見て不審を起さねばならぬソレもいよ〳〵官途に氣がないとならば田舍にでも引込んで仕舞へば宜いに都會の眞中に居て然かも多くの人に交際して口も達者に筆もまめに酒蛙々〳〵と饒舌たり書たりするから世間の目に觸れ易く隨て人に不審を懷かせるのも自然の勢である之を第一として、モ一つ本當の事を云ふと私の言論を以て政治社會に多少の影響を及ぼしたこともありませう例へば是れまで頓と人の知らぬ事で面白い話がある明治十年西南の戰爭も片付て後、世の中は靜になつて人間が却て無事に苦しむと云ふとき私が不圖思付て是れは國會論を論じたら天下に應ずる者もあらう隨分面白からうと思てソレから其論說を起草してマダ其時には時事新報と云ふものはなかつたから報知新聞の主筆藤田茂吉、箕浦勝人に其草稿を見せて「此論說は新聞の社說として出されるなら出して見なさい屹と世間の人が悅ぶに違ひない但し此草稿のまゝに印刷すると文章の癖が見えて福澤の筆と云ふことが分るから文章の趣意は無論、字句までも原稿の通りにして唯意味のない妨げにならぬ處をお前達の思ふ通りに直して試みに出して御覽、世間で何と受けるか面白いではないか」と云ふと年の若い元氣の宜い藤田箕浦だから大に悅んで草稿を持て歸て早速報知新聞の社說に載せました當時世の中にマダ國會論の勢力のない時ですから此社說が果して人氣に投ずるやら又は何でもない事になつて仕舞ふやら頓と見込みが付かぬ凡そ一週間ばかり毎日のやうに社說欄内を

塡めて又藤田箕浦が筆を加へて東京の同業者を煽動するやうに書立てゝ世間の形勢如何と見て居た所が不思議なる哉、凡そ二三箇月も經つと東京市中の諸新聞は無論、田舍の方にも段々議論が喧しくなつて來て遂には例の地方の有志者が國會開設請願なんて東京に出て來るやうな騷ぎになつて來たのは面白くもあれば又ヒヨイと考直して見れば假令ひ文明進歩の方針とは云ひながら直に自分の身に必要がなければ物數寄と云はねばならぬ其物數寄な政治論を吐て圖らずも天下の大騷ぎになつてサア留めどころがない恰も秋の枯野に自分が火を付けて自分で當惑するやうなものだと少し怖くなりました併し國會論の種は維新の時から蒔てあつて明治の初年にも民選議院云々の說もあり其後とても毎度同樣の主義を唱へた人も多いソンな事が深い永い原因に違ひはないけれども不圖した事で私が筆を執て事の必要なる理由を論じて喋々喃々數千言嚙んでくゝめるやうに言て聞かせた跡で間もなく天下の輿論が一時に持上て來たから如何しても報知新聞の論說が一寸と導火になつて居ませう其社說の年月を忘れたから先達箕浦に面會昔話をして新聞の事を尋ねて見れば同人もチヤンと覺えて居て其後古い報知新聞を貸して呉れて中を見ると明治十二年の七月二十九日から八月十日頃まで長々と書並べて一寸と辻褄が合て居ます是れが今の帝國議會を開く爲めの加勢になつたかと思へば自分でも可笑しいシテ見ると先きの明治十四年の騷動に福澤が政治に關係するなんかと云はれて其後も兎角私の身に目を着ける者が多くて色々に怪しまれたのも直接に身に覺えのない事とは云ひながら間接には自から因緣のないではない國會開設改進々歩が國の爲めに利益なればこそ善けれ、是れが實際の不利益ならば私は

現世の罪は免かれても死後閻魔の廳で酷い目に逢ふ筈でせう報知新聞の一件ばかりでない政治上に就て私の言行は都てコンな鹽梅式で自分の身の私に利害はない所謂診察醫の考で政府の地位を占めて自から政權を振廻はして天下の治療をしやうと云ふ了簡はないが如何でもして國民一般を文明開化の門に入れて此日本國を兵力の强い商賣繁昌する大國にして見たいと計り夫れが大本願で自分獨り自分の身に叶ふ丈けのことをして政界の人に交際すればとて誰に逢ふても何ともない別段に賴むこともなければ相談することもない貧富苦樂獨り分に安んじて平氣で居るから考の違ふ役人達が私の平生を見たり聞たりして變に思ふたのも決して無理でない、けれども眞實に於て私は政府に對して少しも怨はない役人達にも惡い人と思ふ者は一人もない、是れが封建門閥の時代に私の流儀にして居たらばソレコソ如

何なる憂き目に逢て居るか知れない今日安全に壽命を永くして居るのは明治政府の法律の賜と思て喜んで居ます

ソレから明治十五年に時事新報と云ふ新聞紙を發起しました丁度十四年政府變動の後で慶應義塾先進の人達が私方に來て頻りに此事を勸める私も亦自分で考へて見ると世の中の形勢は次第に變化して政治の事も商賣の事も日々夜々運動の最中、相互に敵味方が出來て議論は次第に喧しくなるに違ひない既に前年の政變も孰れが是か非かソレは差置き双方主義の相違で喧嘩をしたことである政治上に喧嘩が起れば經濟商賣上にも同樣の事が起らねばならぬ今後はいよ〳〵ます〳〵甚だしい事になるであらう此時に當て必要なるは所謂不偏不黨の說であるが扨その不偏不黨とは口でこそ言へ、口に言ひながら心に偏する所があつて一身の利害に引かれては迚も公平の說を立てる

事が出來ないソコで今全國中に聊かながら獨立の生計を成して多少の文思もありながら其身は政治上にも商賣上にも野心なくして恰も物外に超然たる者は嗚呼がましくも自分の外に適當の人物が少なからうと心の中に自問自答して遂に決心して新事業に着手したものが卽ち時事新報です既に決斷した上は友人中これを止める者もありしが一切取合はず新聞紙の發賣數が多からうと少なからうと他人の世話にならうと思はず此事を起すも自力なれば倒すも自力なり假令ひ失敗して廢刊しても一身一家の生計を變ずるに非ず又自分の不名譽とも思はず起すと同時に倒すの覺悟を以て世間の風潮に頓着なしに今日までも首尾能く遣て來たことですが畢竟私の安心決定とは申しながら其實は私の朋友には正直有爲の君子が多くて何事を打任せても間違ひなど云ふ忌な心配は聊かもない發行の當分何年の間は中上

川彦次郎が引受け其後は伊藤欽亮今は次男の捨次郎が之に任じ、會計は本山彦一、次で坂田實、今は戸張志智之助等が專ら擔任して居ますが私の性質として金錢出納の細目を聞たこともなく見たこともなく其人々のするがまゝに任かせて置て曾て一度も變な間違ひの出來たことはない、誠に安心氣樂なものですコンな事が新聞事業の永續する譯でせう又編輯の方に就て申せば私の持論に執筆者は勇を鼓して自由自在に書く可し他人の事を論じ他人の身を評するには自分と其人と兩々相對して直接に語られるやうな事に限りて其以外に逸す可らず如何なる劇論、如何なる大言壯語も苦しからねど新聞紙に之を記すのみにて扨その相手の人に面會したとき自分の眞心に愧ぢて卒直に陳べることの叶はぬ事を書て居ながら遠方から知らぬ風をして恰も逃げて廻はるやうなものは之を名づけて蔭辨慶の筆と云ふ其蔭辨慶

こそ無責任の空論と爲り罵詈讒謗の毒筆と爲る、君子の愧づ可き所なりと常に警しめて居ます併し私も次第に年をとり何時までもコンな事に勉强するでもなし老餘は成る丈け閑靜に日を送る積りで新聞紙の事も若い者に讓り渡して段々遠くなつて紙上の論說なども石河幹明、北川禮弼、堀江歸一などが專ら執筆して私は時々立案して其出來た文章を見て一寸々々加筆する位にして居ます

扨これまで長々と話を續けて私の一身の事、又私に關係した世の中の事をも語りましたが私の生涯中に一番骨を折たのは著書飜譯の事業で是れには中々話が多いが其次第は本年再版した福澤全集の緒言に記してあれば之を略し著譯の事を別にして元來私が家に居り世に處するの法を一括して手短に申せば都て事の極端を想像して覺悟を定めマサカの時に狼狽せぬやうに後悔せぬやうにと許り考へて居ます

生きて居る身はいつ何時死ぬかも知れぬから其死ぬ時に落付て靜にしやうと云ふのは誰も考へて居ませう夫れと同樣に例へば私が自身自家の經濟に就ては何としても他人に對して不義理はせぬと心に決定して居るから危い事を犯すことが出來ない斯うすれば利益があるうすれば金が出來るなど云ても危險を犯して失敗したときには必ず狼狽することがあらう後悔することがあらうと思て手を出すことが出來ない、金を得て金を使ふよりも金がなければ使はずに居る、按摩按腹をしても餓ゑて死ぬ氣遣ひはない粗衣粗食などに閉口する男でないと力身込んで居るやうな譯けで私が經濟上に不活潑なのは失敗の極端を恐れて鈍くして居るのですが其外直接に一身の不義理にならぬ事に就ては必ずしも不活潑でないトゞの詰り遺傷なつても自身獨立の主義に妨げのない限りは颯々と遣ります例へば慶應義塾を開

いて何十年來樣々變化は多い時としては生徒の減ることもあれば增ることもある、唯生徒ばかりでない會計上からして教員の不足することも度々でしたがソンな時にも私は少しも狼狽しない生徒が散ずれば散ずるまゝにして置け、教員が出て行くなら行くまゝにして留めるな、生徒散じ教員去て塾が空屋になれば殘る者は乃公一人だソコで一人の根氣で教へられる丈けの生徒を相手に自分が教授して遣るソレも生徒がなければ强ひて教授しやうとは云はぬ福澤諭吉は大塾を開て天下の子弟を教へねばならぬと人に約束したことはない塾の盛衰に氣を揉むやうな馬鹿はせぬと腹の底に極端の覺悟を定めて塾を開た其時から何時でも此塾を潰して仕舞ふと始終考へて居るから少しも怖いものはない、平生は塾務を大切にして一生懸命に勉强もすれば心配もすれども本當に私の心事の眞面目を申せば此勉强心配は浮世

の戯れ、假りの相ですから勉めながらも誠に安氣です近日は又慶應義塾の維持の爲めとて本塾出身の先進輩が頻りに資金を募集して居ます是れが出來れば斯道の爲めに誠に有益な事で私も大に喜びますが果して出來るか出來ないか私は唯靜にして見て居ます又時事新報の事も同樣、最初から是非とも永續させねばならぬと誓を立てた譯けでもなし或は倒れることもあらう其時に後悔せぬやうにと覺悟をして居るから是れも左までの心配にならぬ又私の著譯書に他人の序文を求めたことのないのも矢張り同じ趣意であると申すは人の序文題字などを以て出版書の信用を增すは自から名譽でもあらうが內實は發賣を多くせんとするの計略と云ても宜しい所が私の考は左樣でない自分の著譯書が世間に流行すれば宜いと固より心の中に願ひながらも又一方から考へて是れが全く賣れなくても後悔はしないと例の極

端を覺悟して居るから實際の役にも立たぬ餘計な文字を人に書て貰たことはない又他人に交はるの法も此筆法に從ひ私は若い時からドチラかと云へば出しやばる方で交際の廣い癖に遂ぞ人と喧嘩をしたこともない親友も甚だ多いが此交際に就ても矢張り極端説は忘れない今日まで此通りに仲好く附合はして居るが先方の人がいつ何時變心せぬと云ふ請合は六かしい若し左樣なれば交際は罷めなければならぬ交際を罷めても此方の身に害を加へぬ限りは相手の人を憎むには及ばぬ唯近づかぬやうにする計りだコンな事で朋友が一人なくなり二人なくなり次第に淋しくなつて自分獨り孤立するやうになつても苦しうない決して後悔しない自分の節を屈して好かぬ交際は求めずと少年の時から今に至るまでチャンと説は極めてありながら扨實際には頓とソンな必要はない生來六十餘年の間に知る人の數は何千も何萬もある其中で誰と喧嘩したことも義絶したこともないのが面白い都て斯う云ふ鹽梅式で私の流儀は仕事をするにも朋友に交はるにも最初から棄身になつて取て掛り假令ひ失敗しても苦しからずと浮世の事を輕く視ると同時に一身の獨立を重んじ人間萬事、停滯せぬやうにと心の養生をして參れば世を渡るに左までの困難もなく安氣に今日まで消光して來ました扨又心の養生法は右の如しとして身の養生は如何だと申すに私の身に極めて宜しくない極めて赤面すべき惡癖は幼少の時から酒を好む一條で然かも圖抜けの大酒、世間には大酒をしても必ずしも酒が旨いとは思はず飲んでも飲まなくても宜いと云ふ人があるが私は左樣でない私の口には酒が旨くて多く飲みたい其上に上等の銘酒を好んで酒の良否が誠に能く分る先年中一樽の價七八圓のとき上下五十錢も相違すれば先づ價を聞かずにチャンと

其風味を飲み分けると云ふやうな黒人で其上等の酒をウンと飲んで
肴も良い肴を澤山喰ひ滿腹飲食した跡で飯もドッサリ食べて殘す所
なしと云ふ誠に意地の穢ない所謂牛飲馬食とも云ふ可き男である尙
ほ其上に此賤しむ可き男が酒に醉て醉狂でもすれば自から警めると
云ふこともあらうが大酒の癖に酒の上が決して惡くない醉へば唯大
きな聲をして饒舌るばかり遂ぞ人の氣になるやうな厭がるやうな根
性の惡いことを云て喧嘩をしたこともなければ上戸本性眞面目にな
つて議論したこともないから人に邪魔にされない是れが却て不幸で
本人は宜い氣になつて酒とさへ云へば一番先きに罷出て人の一倍も
二倍も三倍も飲んで天下に敵なしなんて得意がつて居たのは返す〳〵
も愧かしい事であるが酒の事を除て其外になれば私は少年の時から
宜い加減な攝生家と云ても宜しい何も別段に攝生をしやうなんてソ

ンな六かしい考のあらうやうもないが日に三度の食事の外にメッタ
に物を食はない或は母が食べさせなかつたのか知らぬが幼少から癖
になつて間の食物が欲しくない殊に晩食の後夜になれば如何なる好
物があつても口に入れることが出來ない例へば親類の不幸に通夜す
るとか又は近火の騷ぎに夜を更かすとかして自然に其處に食物が出
て來ても食ふ氣にならぬ是れは母に仕込まれた習慣が生涯殘て居る
のでせう攝生の爲めには最も宜しい習慣です又私は隨分氣の長い方
でない何事もテキパキ早く遣ると云ふ風で時としては人に笑はれる
やうな事も多い所が三度の食事となると丸で別人のやうに變化して
何としても早く食ふことが出來ない子供の時に早飯と何とやらは武
士の嗜なんと云て人に惡く云はれた事もあり又自分でも早く食ひた
いと思て居たが何分にも頬張て生嚙にして食ふことが出來ない其後

西洋流の書を讀んで生嚙の宜しくない事を知て始めて是れは却て自分の惡い癖が宜い事になつたと合點して大きに悅び爾來憚る所もなくゆる〳〵食事をして凡そ人の一二倍も時を費します是れも攝生の爲めに甚だ宜しい

ソレカラ又酒の話になつて私が生得酒を好んでも鄕里に居るとき少年の身として自由に飲まれるものでもなし長崎では一年の間禁酒を守り大阪に出てから隨分自由に飲むことは飲んだが兎角錢に窮して思ふやうに行かず年二十五歳のとき江戸に來て以來囊中も少し溫かになつて酒を買ふ位の事は出來るやうになつたから勉强の傍ら飲むことを第一の樂みにして朋友の家に行けば飲み、知る人が來ればスグに酒を命じて客に勸めるよりも主人の方が嬉しがつて飲むと云ふやうな譯けで朝でも晝でも晩でも時を嫌はず能くも飲みました夫れか

ら三十二三歳の頃と思ふ獨り大に發明して斯う飲んでは迚も壽命を全くすることは叶はぬ左ればとて斷然禁酒は以前に覺えがある唯一時の事で永續きが出來ぬ、詰り生涯の根氣でそろ〳〵自から節するの外に道なしと決斷したのは支那人が阿片を罷めるやうなもので隨分苦しいが先づ第一に朝酒を廢し暫くして次ぎに晝酒を禁じたが客のあるときは矢張り客來を名にして飲んで居たのを漸く我慢して後には其客ばかりに進めて自分は一杯も飲まぬことにして是れ丈けは如何やら斯うやら首尾能く出來てサア今度は晩酌の一段になつて其全廢は迚も行はれないからそろ〳〵量を減ずることにしやうと方針を定め口では飲みたい、心では許さず、口と心と相反して喧嘩をするやうに爭ひながら次第々々に減量して稍や穩になるまでには三年も掛りました、と云ふのは私が三十七歳のとき酷い熱病に罹て萬死一生の幸を

得た其とき友醫の說に是れが以前のやうな大酒では迚も助かる道はないが幸に今度の全快は近年節酒の賜に相違ないと云たのを覺えて居るから私が生涯鯨飲の全盛は凡そ十年間と思はれる其後酒量は減ずるばかりで增すことはない初めの間は自から制するやうにして居たが自然に減じて飲みたくも飲めなくなつたのは道德上の謹愼と云ふよりも年齡老却の所爲でせう兎に角に人間が四十にも五十にもなつて酒量が段々〳〵强くなつて遂には唯の淸酒が利きが鈍いなんてブランデーだのウヰスキーだの飲む者があるがアレは宜くない苦しからうが罷めるが上策だ私の身に覺えがある私のやうな無法な大酒家でも三十四五歲のときトウ〳〵酒慾を征伐して勝利を得たから況して今の大酒家と云ても私より以上の者は先づ少ない高の知れた酒客の葉武者だ、そろ〳〵遣れば節酒も禁酒も屹と出來ませうソレから私の身體運動は如何だと其話もしませう幼年の時から貧家に生れて身體の運動はイヤでもしなければならぬソレが習慣になつて生涯身體を動かして居ます少年のとき荒仕事ばかりして冬になると㨨が切れて血が出るスルと木綿絲で㨨の切口を縫て熱油を滴らして手療治をして居た事を覺えて居る江戸に來てから自然ソンナことが無くなつたから或る時

鄙事多能年少春　立身自笑却壞身
浴餘閑坐肌全淨　曾是綿絲縫㨨人

と云ふ詩のやうなものを記した事がある又藩中に居て武藝をせねば人でないやうに風が惡いから中村庄兵衛と云ふ居合の先生に就て少し稽古したから其後洋學修業に出ては國に居るときのやうに荒い仕事をしないから始終居合刀を所持して大阪の藩の倉屋敷に居ると

き又緒方の塾でも折節はドタバタ遣て居ました夫れから江戸に來て世間に攘夷論が盛になつてから居合は罷めにして兼て腕に覺えのある米搗を始めて折々遣て居た所が明治三年大病を煩ふて病後何分にも舊のやうにならぬ其年か翌年か岩倉大使が歐行に付き親友の長與專齋も隨行を命ぜられ近々出立とて私方に告別に參りキニーネ一オンスのビンを懷中から出して「君の大病全快はしたが來年其時節に爲ると何か故障を生じて藥品の必要があるに違ひない是れは鹽酸キニーネ最上の品で藥店などにはない、之を遣るから大事に貯へて置け僕の留守中に思當ることがあらう」と云ふのは實に朋友の深切なれども私は却て喜ばぬ「馬鹿なことを云て呉れるな病氣全快の僕の身に藥なんぞ要るものか面白くもない僕は貰はない」と云ふと長與が笑て「知らぬ事を云ふな屹と役に立つことがあるから默て取て置け」と云て其藥

を私に渡して別れた所が果して然り長與の外行留主中毎度發熱して夫れキニーネ又キニーネとてトウ〳〵一オンスの品を飲み盡したと云ふやうな容體で何分にも力が回復しない横濱の友醫ドクトル シモンズの說に何でも肌に着くものはフラネルにせよと云ふからシャツも股引もフラネルで拵へ足袋の裏にもフラネルを着けさせて全身を纏ふて居た所が頓と効能が見えぬドウかすると風を引て惡寒を催して熱が昇る毎度の事で凡そ二年餘り三年になつても同樣であるから或日私が大に奮發して是れは醫師の命令に從ひ餘り病氣を大切にして云はゞ病に媚るやうなものだ此方から媚るから病は段々付揚る自分の身體には自分の覺えがある眞實の病中には固より醫命に服することなれども今日は病後の攝生より外に要はないから自分で攝生を試みませう抑も自分の本は田舍士族で少年のとき如何なる生活し

て居たかと云へば麥飯を喰ひ唐茄子の味噌汁を啜り衣服は手織木綿のツンツルテンを着てフラネルなんぞ目に見たこともない此田舍者が開國の風潮に連れ東京に住居して當世流に攝生も可笑しい田舍者の身體の方が驚いて仕舞ふ即ち今日風を引たり熱が出たりしてグズ〳〵して居るのは攝生法の上等に過る誤であるから直に前非を改めると申して其日からフラネルのシャツも股引も脱ぎ棄てゝ仕舞て唯の木綿の襦袢に取替へストーブも餘りに焚かぬやうにして洋服は馬に乘る時計り騎馬の服と定めて不斷は純粹の日本の着物を着て寒い風が吹通しても構はず家にも居れば外にも出る唯食物ばかりを西洋流に眞似て好き品を用ひ其他は一切むかしの田舍土族に復古してソレから運動には例の米搗薪割に身を入れて少年時代の貧乏世帶と同じやうにして毎日汗を出して働いて居る中に次第に身體が丈夫にな

つて風も引かず發熱もせぬやうになつて來ました私の身の丈けは五尺七寸三四分體量は十八貫目足らず年の頃十八九の時から六十前後まで增減なし十八貫を出たこともなければ十七貫に下たこともない隨分調子の宜しい其身體が病後は十五貫目にまで減じて二三年惱んだが此田舍流の攝生法でチャンと舊の通りに復して其後六十五歲の今日に至り今でも十七貫五百目より少なくはない扨私が考へるに右の田舍攝生が果して實効を奏したのか又は病の回復期が自然に來た處で偶然にも攝生法を改めたのかソレは何とも判斷が付かぬ、兎に角に生理上必要の處に少し注意さへすれば田舍風の生活も惡くないと云ふこと丈けは確かに分る但し肌に寒風の吹通しが有益であるか又は外の攝生を以て體力が强くなつて實際害に爲る可き寒風にも能く抵抗して之に堪ふるのであるか、卽ち寒風其物は藥に非ず寒風をも犯

して無頓着と云ふ其全般の生活法が有益であるか凡そ此種の關係は醫學の研究す可き問題と思ひます

ソレは扨置き私の攝生は明治三年三十七歳大病の時から一面目を改め書生時代の亂暴無茶苦茶殊に十年間鯨飲の惡習を廢して今日に至るまで前後凡そ四十年になりますが此四十年の間にも初期は文事勉強の餘暇を偷んで運動攝生したものが次第に老却するに從ひ今は攝生を本務にして其餘暇に文を勉めることにしました今でも宵は早く寢て朝早く起き食事前に一里半ばかり芝の三光から麻布古川邊の野外を少年生徒と共に散歩して午後になれば居合を拔たり米を搗たり一時間を費して晩の食事もチャンと規則のやうにして雨が降ても雪が降ても年中一日も缺かしたことはない去年の晩秋戯れに

一點寒鐘聲遠傳　半輪殘月影猶鮮

草鞋竹策侵秋曉　歩自三光渡古川

なんて詩を作りましたが此運動攝生が何時まで續くことやら自分で自分の體質の强弱、根氣の有無を見て居ます回顧すれば六十何年、人生既往を想へば恍として夢の如しとは毎度聞く所であるが私の夢は至極變化の多い賑かな夢でした舊小藩の小士族窮窟な小さい箱の中に詰込まれて藩政の楊枝を以て重箱の隅をほじくる其楊枝の先きに掛た少年がヒョイと外に飛出して故郷を見捨るのみか生來教育された漢學流の教をも打遣て西洋學の門に入り以前に變た書を讀み、以前に變つた人に交はり自由自在に運動して二度も三度も外國に往來すれば考は段々廣くなつて舊藩は扨置き日本が狹く見えるやうになつて來たのは何と賑かな事で大きな變化ではあるまいか、或は其間に艱難辛苦など述立てれば大造のやうだが咽元通れば熱さ忘れると云ふ其

通りで艱難辛苦も過ぎて仕舞へば何ともない、貧乏は苦しいに違ひないが其貧乏が過ぎ去た後で昔の貧苦を思出して何が苦しいか却て面白いくらゐだから私は洋學を修めて其後ドウやら斯うやら人に不義理をせず頭を下げぬやうにして衣食さへ出來れば大願成就と思て居た處に又圖らずも王政維新、いよ〳〵日本國を開て本當の開國となつたのは難有い幕府時代に私の著はした西洋事情なんぞ出版の時の考には天下にコンなものを讀む人が有るか無いか夫れも分らず假令ひ讀んだからとて之を日本の實際に試みるなんて固より思ひも寄らぬことで一口に申せば西洋の小說夢物語の戲作くらゐに自から認めて居たものが世間に流行して實際の役に立つのみか新政府の勇氣は西洋事情の類でない一段も二段も先きに進んで思切た事を斷行してアベコベに著述者を驚かす程のことも折々見えるからソコで私も亦以

前の大願成就に安んじて居られないコリャ面白い此勢に乘じて更に大に西洋文明の空氣を吹込み全國の人心を根柢から轉覆して絕遠の東洋に一新文明國を開き東に日本、西に英國と相對して後れを取らぬやうになられないものでもないと玆に第二の誓願を起して扨身に叶ふ仕事は三寸の舌一本の筆より外に何もないから身體の健康を賴みにして專ら塾務を務め又筆を弄び種々樣々の事を書き散らしたのが西洋事情以後の著譯です一方には大勢の學生を敎育し又演說などして所思を傳へ又一方には著書飜譯隨分忙しい事でしたが是れも所謂萬分一を勉める氣でせう、所で顧みて世の中を見れば堪へ難いことも多いやうだが一國全體の大勢は改進々〳〵歩の一方で次第々々に上進して數年の後その形に顯はれたるは日淸戰爭など官民一致の勝利愉快とも難有いとも云ひやうがない命あればこそコンな事を見聞する

のだ前に死んだ同志の朋友が不幸だアヽ見せて遣りたいと毎度私は泣きました實を申せば日清戰爭何でもない唯是れ日本の外交の序開きでこそあれソレほど喜ぶ譯けもないが其時の情に迫まれば夢中にならずには居られない凡そコンな譯けで其原因は何處に在るかと云へば新日本の文明富强は都て先人遺傳の功德に由來し吾々共は丁度都合の宜い時代に生れて祖先の賜を唯貰ふたやうなものに違ひはないが兎に角に自分の願に掛けて居た其願が天の惠み祖先の餘德に由て首尾能く叶ふたことなれば私の爲めには第二の大願成就と云はねばならぬ、左れば私は自分の既往を顧みれば遺憾なきのみか愉快な事ばかりであるが扨人間の慾には際限のないもので不平を云はすればマダ〳〵幾らもある、外國交際又は內國の憲法政治などに就て其れ是れと云ふ議論は政治家の事として差置き私の生涯の中に出來して見

たいと思ふ所は全國男女の氣品を次第々々に高尙に導いて眞實文明の名に愧かしくないやうにする事と佛法にても耶蘇敎にても孰れにても宜しい之を引立てゝ多數の民心を和らげるやうにする事と大に金を投じて有形無形高尙なる學理を研究させるやうにする事と凡そ此三ヶ條です、人は老しても無病なる限りは唯安閑としては居られず私も今の通りに健全なる間は身に叶ふ丈けの力を盡す積です

福翁自傳終

愛せよ。然らば用うかれ人
大学生

勉強 勉強。
先生の間い誘ず

先生の間い誘ず

10.30

福翁自傳

福澤先生
誕生百年記念

慶應義塾

昭和九年十月三十日印刷
昭和九年十一月三日發行

非賣品

編輯兼發行者　東京市麹町區丸ノ内二丁目十八番地　株式會社　時事新報社

東京市麹町區丸ノ内二丁目十八番地
右代表取締役　山本昌一

印刷者　東京市芝區田村町六丁目一番地　吉田直明

印刷所　東京市芝區田村町六丁目一番地　東洋印刷株式會社

80
204

終